



Title	バルザックにおける小説構造の美学：『結婚財産契約』をめぐって
Author(s)	柏木, 隆雄
Citation	大阪大学大学院文学研究科紀要. 2008, 48, p. 33-80
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/11224
rights	本文データはCiNiiから複製したものである
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

バルザックにおける小説構造の美学

——『結婚財産契約』をめぐる——

柏木 隆雄

I はじめに — 『結婚財産契約』の位置

『人間喜劇』全137篇を予定した壮大な19世紀の風俗画史は、まず『私生活情景』から始まる。バルザックが本格的な作家活動を始めて以来、彼の作品群をくくる題名として、ほとんど欠けることのなかったテーマ、『私生活情景』⁽¹⁾とはいったい何か。彼の公式な説明をまず見てみることにしよう。1845年の彼の最初の全集フルヌ版『人間喜劇』に付した『総序』で、彼は『私生活情景』は「幼年期、青年期の過ちを表現するもの」としている。この説明は実はその8年前にさかのぼる1834年から1837年にかけて、それまでに書き上げていた様々な作品を集めた上に、またさらに新たな作品の構想をも明らかにして、『私生活情景』、『パリ生活情景』、『地方生活情景』といった、後の『人間喜劇』の各情景の構造をすでに備えている全12巻の叢書『19世紀風俗研究』を発刊した際の序文を下敷きにしたものである。バルザックの趣意をうけた年少の友人フェリックス・ダヴァン（1807—1836）の執筆で、バルザックの『総序』のそれよりも、各情景の主題や意義をいっそう詳しく説明している。

『私生活情景』においては、かつて他の場所で述べたように、扱う人生の時期は、やがて終ろうとする思春期の最後の発展段階と、これから始まることになる遅い男としてする最初の打算との間に取られている。したがって、そこではもともと激しい感情があり、無反省な感動がある。そこで犯される過ちは、意思というよりは風習に慣れず、世間の道に無知なためである。また女性については、不幸せなために、感情の真率さを信じ込んでしまったり、あるいは夢想到にひきずられることから過ちが犯されるのだ。そうした信じやすさや夢想は、いずれ彼らが生きていくうちにいろいろと学んで払拭されて

(1) このタイトルで出版されたものを以下に記す。どれほどこの呼称にこだわっているか、理解できよう。
Scènes de la vie privées, publiées par M. Balzac(sic), Paris, Mame et Delaunay-Vallée, levavasseur, 1830, 2 vols.
Scènes de la vie privée, publiées par M. Balzac, Paris, Mame-Delaunay, 1832, 4 vols.
Scènes de la vie privée, par M. de Balzac in *Études de mœurs au XIX^e siècle*, Madame Charles-Béchet, 1834-1835, 4 vols.
Scènes de la vie privée, Nouvelle édition revue et corrigée, Charpentier, 1839, 2 vols.
Scènes de la vie privée, in *La Comédie humaine*, tome I-IV, Furne, J.-J. Dubochet et C^{ie}, Hetzel et Paulin, 1842-1845.

しまうのだけれど。青年は純粹である。彼らの不運が生まれるのは、社会の掟が作り出す、あの目に見えない対立、我々の本能の最も自然な欲求と、最も止みがたい願望が深いところで発現する葛藤からなのだ。そこでは、心の懊悩が元来一番最初の、そしてもっとも許容しうる我々の過ちということになる。この人間の運命の最初の光景は、どんな環境においても変わりはなかった。だからこの著者は安んじていたところを逍遙したのである。あるいは田園地方の片隅、あるいは地方の奥深く、またさらにパリの深層まで。⁽²⁾

つまり、青年として社会に一人立ちするまでに彼らが受ける、フローベールのいわゆる『感情教育』が主題ということである。もともと『私生活情景』というのは、1827年に出た『故シャミー子爵夫人が残した同時代情景および歴史的情景』（これはバルザックが印刷業を営んでいた時、彼が手掛けた仕事の一つでもある）の〈情景〉からその発想を借りていて、そこでは架空の子爵一家の有り様を通して、王政復古下の旧貴族、亡命貴族たちのいわゆる「何も学ばず、何も忘れてはいない」愚昧な様が描かれていたから、それに倣う形で、表向き当代の青年の生き方への指針を標榜するのは自然の成り行きだろう。当然そこには、家庭の教育、母親や父親の役割が、道徳的な意図をこめて語られることになる。

たしかに『鞠うつ猫の店』の純情な娘が身分違いの結婚で不幸に遭う話から始まって、『モDEST・ミニョン』の主人公のように賢明な選択をする娘へと移り、さらに『フィルミアニ夫人』に見る貞淑な妻から、『ゴリオ爺さん』、『シャベール大佐』、『無神論者のミサ』、『禁治産』と、夫に対して不貞で、大胆な妻の姿へとテーマを移して来たバルザックは、これから扱う『結婚財産契約』においても、その執筆意図を次のようにハンスカ夫人に伝えている。

『谷間の百合』については校正は進んでいます。これが出るのは「両世界評論」で、あなたはご旅行中でしょう。これほど内面を描いた優れた作品は書いたことがありません。『ゴブセック』を書き直し、加筆もしました。これから『花形の男』という作品で自身のことに思いをいたすことになります。これまであらゆる女性の不運な様を描いてきました。これから夫の苦悩を示さないとはいけません。⁽³⁾

つまり、従来の結婚すべき若い女性から、結婚すべき若い男性に対象を変えて、その「私

(2) Félix Davin, Introduction aux "Etudes de mœurs au XIX^e siècle" in Balzac, *La Comédie humaine*, tome I, éd. de la Pléiade, 1976, pp.1143-1144.

(3) A Mme Hanska, le 24 août, 1835, in Balzac, *Lettres à Mme Hanska*, Robert Laffont, "Bouquins" tome I, 1990, pp.268-269.

生活」の情景を描く、というわけなのだ。

『私生活情景』のタイトルは、何よりもまず1830年の彼の最初の短編集に名付けられたもので、それがさらに1832年の4冊が刊行され、そうして1834年から発刊される『19世紀風俗研究』全12冊中、最初の2巻となるのであるが、そこに初めて現行『結婚財産契約』が *La Fleur des pois* 「社交界の寵児」、「花形」(男性だけをいう) というタイトルで出て、それは『私生活情景』の第2巻の冒頭に配されていた。その際、現在のエディションでは省かれている章題が付けられていて、まず *Le pour et le contre* 「正と反」、ついで「結婚財産契約」となって、それが第一日、第二日、第三日、と分けられ、さらに「別居」という章が設けられて、あとポール・ド・マネルヴィルの妻ナタリーへの手紙、妻から夫への返事、そしてポールの友人アンリ・ド・マルセーのナタリーへの手紙で終わる章立てである。

この作品の第2版となるシャルパンチエ版『私生活情景』の第2巻でも、ほぼ同じ構成をとっているが、⁽⁴⁾ 第一日、第二日、第三日と『結婚財産契約』の章は分けられていない。つまり頁の増加を防ぐために、詰めて印刷されているのである。1842年から刊行のフルヌ版『人間喜劇』のテキストは、他のすべての収録作品と同様に、従来の単行本にあった章割りや、小見出しがほとんど省略され、したがって、この『結婚財産契約』も、*La Fleur des pois* 「社交界の寵児」の全体としてのタイトルが、中間の章題であった『結婚財産契約』に変わり、その他の章題は削除されている。以降この作品は『結婚財産契約』 *Le Contrat de mariage* として表記されることになった。

もともとのオリジナルは *La Revue étrangère de Saint-Pétersbourg*, tome XVI, No. 30, 33, 36 に出て、それぞれ1835年10月31日、11月30日、12月30日と1ヶ月毎の3回連載であった。といっても、これは先に出ていた『19世紀風俗研究』の第3版、第2巻に出たものをそのまま取ったもので、出版は11月13日と公式の記録には出ている。バルザック自身の所有になる1842年刊行のフルヌ版『人間喜劇』の第3巻には、他の巻と同様、作家の書き込みがあるが、⁽⁵⁾ 他の作品への書き込みに比較すると、それほど多くはない。

この作品は作曲家ロッシーニ *Gioacchino Rossini* (1792-1868) に捧げられている。バルザックはこのイタリア人音楽家の愛人であるオランプ・ペリシエの家で彼と知り合い、深く交わった。ロッシーニの『モーゼ』という歌劇についての批評が、『マッシミラ・ドニ』に書かれていることは人の知るとおり。オランプはのちにロッシーニの正式な妻となったが、一説にはバルザック自身も彼女とつきあっていたという。1832年か1833年のベルニー夫人か

(4) 架蔵のこの版の扉にある収録作品の題名には、*FLEUR DES BOIS* となっている。本文はもちろん *La Fleur des pois* なので、単なるミスプリントであろう。

(5) この作品の本邦初訳は、原政夫の「日本におけるバルザック書誌」(駿河台出版社、1969)の記載によれば『結婚の契約』として大正13年5月東京堂「世界名著叢書」の一編として(6編中)新城和一の訳で出ている。現行の創元社版『バルザック全集』には収録されていない。

らの手紙に、バルザックがその「秋の花」Fleur d'automne を自称するオランプ・ペリシエから何度も手紙を貰い、彼女と切れたがっていたことが書かれている。⁽⁶⁾この小説の元来のタイトルは Fleur des pois だから、作品を献呈する相手ロッシーニの愛人（しかもバルザック自身とも多少関わりのある）が、Fleur d'automne と自称していたことは、なかなか意味深長で興味深い事実のように思われる。

いずれにしても、この作品はもともとは19世紀風俗研究の『私生活情景』に収められた作品の中では1. *Le Bal de Sceaux* 2. *Gloire et Malheur (La maison de Chat-qui-pelote)* 3. *La Vendetta* に続いて配置されており、この配列は1839年のシャルパンティエ版の『私生活情景』においても全く変わるところがない。ところが1842年の『人間喜劇』において、その配列ががらりと変わる。すなわち『ゴリオ爺さん』、『シャベール大佐』、『無神論者のミサ』、『禁治産』に続く位置にあり、単純化して言えば、それまで『私生活情景』の冒頭近くに置かれていたものが、バルザック自身が決定的な全集とする段階にいたって、『私生活情景』の最後近くに置かれるようになったということである。このことは案外作品の性質を考えると、重要な鍵を提示するのではないか。

というのも、それまでの配列から考えれば、『ソーの舞踏会』にしても、『栄光と不幸（鞠うつ猫の店）』にしても、さらに『ヴァンデッタ』にしても、すべて若いヒロインがその愛する男の値打ちを過大評価するか、あるいは真の値打ちを悟らないままに、不幸な結婚生活を余儀なくされる、というのが全体の粗筋であるから、もしそれぞれの作品に連関の思想が働いているとしたら、この『社交界の寵児』という作品も、男女いずれかのヒーロー、ヒロインの結婚の失敗、というテーマで繋がっている、という予想が成り立つからだ。⁽⁷⁾

けれどもバルザックの最終的な（バルザックは1850年に亡くなっているから、たとえその後改訂の意志があったとしても、それを知ることはできない）構成は、この作品をそうしたテーマの中に入れるのではなく、『シャベール大佐』、『禁治産』などに続く夫に対して不貞で、大胆な妻の姿を描こうとする一連のシリーズに位置づけようとしたように思われる。さればこそ、もとのタイトルの『社交界の寵児』が、いかにも俗な、夫婦の関係そのものを表す『結婚財産契約』*Le Contrat de mariage* へと変えられたのだろう。そしてこうしたタイトルの変更、作品の収録位置の変更は、また逆に、バルザックの『人間喜劇』の配列が、作品それぞれに作者の意図が浮び出るように、連関して繋がっている、ということを証明しているように思うのだ。しかし単にタイトルや、位置の変更だけでそのことを言うのはやめ

(6) オランプは歌手とかでなく、文学趣味の女性であつたらしく、当時の女流文筆家だけで作る *Heure du soir* の編集にもたずさわっていたようだ。cf. Balzac, *Correspondance*, tome II, Classiques Garnier, 1962, p.205.

(7) 『ソーの舞踏会』、『栄光と不幸（鞠うつ猫の店）』など、『私生活情景』各編のヒロインの運命については、柏木隆雄『謎解き「人間喜劇」』（ちくま学芸文庫、2000）参照。

よう。じっさいにテキストを精細に読み込んでいってこそ、説の当否が検討されなければならない。

II 書き出しの妙味

『結婚財産契約』は以下のように書き出されている。

マネルヴィルの父親は立派なノルマンディーの貴族で、リシュリユー元帥の知遇を得て、その肝いりで娶った妻はボルドーでもっとも大きな相続財産を持つ一人だった。というのもその頃老侯爵がギエンヌ州に総督として権をほしいままにしていたからである。そのノルマンの貴族はペサンに持っていた領地を売り払ってガスコン人に成りおおせた。そうさせたのは美しいランストラックの城とその甘美な佇まいだが、それは妻の持ち物だった。⁽⁸⁾

「マネルヴィルの父親」M. de Manerville le père と始まるのは、この物語がその息子のマネルヴィルが中心となることをまず示すだろう。そして「立派なノルマンディーの貴族」*un bon gentilhomme normand* は、確かにそのように訳せるわけだが、元来ノルマンディーの人は吝嗇、強欲という性質が通り相場になっているから、まさしく「立派なノルマンディーの貴族」とは、吝嗇、強欲を絵に描いたような人物ということを言外に響かせている、とも取ることができる。リシュリユー元帥（1696-1788）は実在の人物である。海軍の大物としてその外交手腕と世に名高い放蕩者（*célèbre roué*）と注されて、バルザックもしばしば自作に登場させるが、*roué* は放蕩者だけでなく、したたかな奴、くえない策略家とも同時に読めるから、その *célèbre roué* をよく知っている、知遇を得た、というマネルヴィルはそれなりに「したたかな男」ということがほのめかされるのであり、かつまたその人間がノルマンディ出身ということになれば、ますます読者は、父マネルヴィルの人柄の抜け目無く、計算に高いことが自ずから理解されることになる。

そのことは、彼がノルマンディの領地を売って、ボルドーに来てガスコーニュに来ることに反映されていると見るべきだろう。ガスコンの人々はエドモン・ロスタンの『シラノ・ド・ベルジュラック』の芝居でもわかるように、気前のいい、勇敢な人種と通り相場になっているから、そこに移り住むことにするマネルヴィルの利害を考える人格が反映され、しかもそうなったのは、「美しいランストラックの城とその甘美な佇まいだが、それは妻の持ち物だった」とあって、同じ美しさに誘惑されての所行にしても、ボルドー人の妻の美貌の故

(8) Balzac, *Le Contrat de mariage*, in *La Comédie humaine*, tome III, éd. de la Pléiade, 1976, p.527.

ではなく、その妻の所有する城と、調度の美しさに「誘惑された」*séduit*と書かれているところに、マネルヴィルという人間の強欲さ、したたかさが浮き彫りにされる。

だからこそ、それに続けて

ルイ15世治世の終わり頃、彼は護衛司令官の地位を買い取って、1813年まで無事に生き延びた。きわめて幸運なかたちで大革命を乗りきったのである。それはこういう次第だ。彼は1790年末にマルティニック島に逃げ出した。妻がそこにいろいろの利権を持っていたのだ。そして財産はそっくり無傷のままに、かつ有利に管理運用してもらったのだった。この手柄はノルマンディの人間にガスコーニュ人が接ぎ木されてこそその果実だった。マネルヴィルの妻が亡くなったのは1810年である。⁽⁹⁾

つまりマネルヴィルの父親は、革命が起こってすぐ、ボルドーの土地を執事にまかせて、妻の縁故でマルチニック島に渡って1813年まで生き延びた。フランスにおいてテロリズムが横行する1793年から1794年は、一般に恐怖政治時代と言われる。まさしくその「恐怖政府」の到来前に、マルティニック島へ逃れるところに父マネルヴィルの才覚を見ることができる。その後、フランスはブルジョワ覇権へと一歩近づくが、彼らと手を結んだナポレオンは、着々と帝政への地歩を固め、新旧の貴族階級のバランスのもとに、政治を行っていった。ナポレオンは1812年のロシア遠征で決定的に打撃を受け、1814年4月フォンテーヌブローにおいて、頼みとした軍の強制する形で退位する事になる。父マネルヴィルは、つまり、そのナポレオン没落の前年に死んだというわけで、ナポレオンが皇帝になるのは1802年末のことだから、マネルヴィル父は革命政府、執政政府のいわゆる民主的政体からきわめて巧みに姿を隠しおおせていたわけだ。おそらく彼は1804年のナポレオン法典成立後、亡命貴族の帰還を促す決定にしたがって、亡命先から帰国したのだろう。しかもマルチニックの財産を持っていたのが妻で、その妻が死んだのは彼より3年も先なのだから、彼はそっくり妻の財産をわがものとしたことになる。むしろその妻の死を待つまでは、けっして死なない決心をしたか、あるいはあたかも妻が一種の隠れた虐待によって、その死を早めたかのような疑いを起こさしめるような書きようでさえある。そのことは次に続く文章からも察することができよう。

若い時にさんざん浪費したおかげで、資本が重要だということを身をもって学び、また多くの老人と同じように、実際以上にその資本に重きを置いたために、マネルヴィル氏は次第に儉約家から貪欲で吝嗇となった。親の吝嗇が子供の散財に繋がることには思

(9) *Ibid.*

い及ばず、彼は息子にはほとんど何一つ与えなかった。たった一人の息子なのである。⁽¹⁰⁾

ここにマネルヴィル氏の冒頭からの人生が要約されている。財産のある古い貴族で若い頃は遊びほうけたが、革命以後の嵐の中、財産の保全に汲々とし、たちまちエゴイストとなって、ひたすら自己の財産を保全し、同時にその財産を握りしめることによって、家庭内での絶対的な権力を振るうという、バルザックの作品によく見られる典型的な形である。グランデ親爺、「幻滅」のセシャルも同様、その他の多くのバルザックの主人公が、吝嗇で圧制的な父親に苦しむ姿が見られる。

1842年の決定版『人間喜劇』、すなわち『無神論者のミサ』から『禁治産』へと至る過程に続いて、この『結婚財産契約』が置かれていることを考えれば、『禁治産』が、浪費家の妻から、自分の子供たちへの財産保全を計ろうとして、妻の奸計のために「禁治産」の憂き目を見る父親デスパール伯爵を語っており、これから語られるマネルヴィル家の場合と、あたかも対照的な位置にあることが、『人間喜劇』を順次読んできたものには察せられるはずだ。したがって、この父マネルヴィルの一生の要約は、単なる導入の域を超えて、じつは物語の重要なヒント、物語のありようを示す鍵の役割を果たしているとも言えるのである。そしてそのためにも、この冒頭における父マネルヴィルの人生は、あくまで詳しい事実は書かれてはならない。もしそれを書いてしまえば、この物語は何の意味もなくなるだろう。いわば黙示録的に、父マネルヴィルの紹介がされていると考えるべきだろう。そのことは、続いて、すぐさま物語の主人公ポール・ド・マネルヴィルが紹介されることに示されている。

ポール・ド・マネルヴィルが帰ってきたのは1810年の終わり頃、ヴァンドームの学寮⁽¹¹⁾から戻ってそのまま父の言いなりに3年間もいた。自分の相続人に69歳の老人が重くおよぼした圧制は、当然心にも性格にも、まだきちんと形成されないでいればこそ、影響せずにはいなかった。ガスコーニュの人間なら当然あると思われる肉体の澁刺さには欠けていないのに、ポールは父親に対して争うことも出来ず、いろいろ抵抗する能力を失ったのだった。それでこそ精神的なたくましが生まれるものなのに。⁽¹²⁾

(10) *Ibid.*

(11) ヴァンドーム学寮はバルザック自身も入っていたところで、バルザックは1807年8歳で入学、1813年14歳まで在学している。とするとこのポール・ド・マネルヴィルもほぼ同じ年代ということが予想される。つまりすくなくともポールは14, 5歳で父のもとに帰ったことになる。すると彼は1794, 5年の生まれと推測され、プレイヤッド版の作中人物索引には1794年生れと書かれている。この年代とヴァンドーム学寮ということで、ポールのモデルがフランスの研究者のあいだで論じられた。プレイヤッド版の注釈者 Henri Gauthier は、バルザックの義弟の友人 Aristide Midy-Boisduval というメナンジェの説、ヴァンドーム学寮の友人 Charles-Louis de Villelume というシトロンの説を紹介している。しかし、こういうモデルの詮索で物語の展開、意義が明らかになったことはあまりない。

(12) *Ibid.*, pp.527-528.

ポールがヴァンドームから帰ってボルドーの父の領地に住むようになるのは、母親が死んでからということになる。ここに登場するポール・ド・マネルヴィルは、他の『人間喜劇』においては『金色の眼の娘』*La Fille aux yeux d'or* (1834) で登場して、その後1842年の決定版『人間喜劇』の『ソーの舞踏会』*Le Bal de Sceaux* (1830) の一場面に書き加えられて登場する。それまで『ソーの舞踏会』においてはモンタラン *Montalant* という名前だったのだが、「人物再登場法」を使用することによって変更されたのである。その際、髪の色は黒からブロンドに変わるようになった。

父マネルヴィルに躰られる形での息子ポールの生い立ちは、どのようなものか。先の引用に続く部分ではっきりとする。

彼の感情はぎゅっと押さえられて、その心の奥底にまで行ってしまい、彼はそれをずっと長い間外へ出さずにいた。そしてもっと後になって、どうやらそうした感情は世間の基準とは違うと感じた時、十分考えた挙げ句、まずい行動に出てしまうことになった。⁽¹³⁾

吝嗇で専制的な父親に押さえつけられたポールの有様がよく分かる。彼の感情が「心の奥底にまで行ってしまい」*aller au fond*, 「それをずっと長い間外へ出さずにいた」*il les garda longtemps sans les exprimer* と書かれるのは、ポールの心の奥底に感情が追いやられて、そのまま沈殿し、容易に外に出てこない、その心の動きをそれらの語句のつながりの中で表現しようとするためだ。だからこそ、

彼はたったの一言から喧嘩もするかと思えば、召使い一人に暇を出すことにもびくびくするのだった。というのも彼の内気なところが、断固とした意志が必要な争いの場になると顔を出すのだ。嫌な目に遭いたくないために、かえって無謀なことをしてしまうが、かといってその反対のことを型どおりに行って未然に防ぐこともしなければ、自分の力を発揮して敢然と立ち向かうこともない。引っ込み思案のくせに、やることは大胆、彼は長い間こうした裏腹の率直さのままでいたから、いろいろなことの犠牲になったり、うかうかと騙されるもするのだった。そうしたことに対して、きちんとした魂の持ち主なら立ち向かうのをためらい、むしろぐっと堪え忍んで、愚痴など言わないものなのだが。⁽¹⁴⁾

とあるように、根は率直な性分、大胆なところも無いわけではないのに、結局は相手の考えに負かされてしまって、それがそのまま外に向かって出すこともできないでいる性格とさ

(13) *Ibid.*, p.528.

(14) *Ibid.*

れることになる。

物語に登場する主たる人物をその最初に紹介する場合、簡単なその人物の所作で、おのずからその風貌を描いてみせるのもあれば、克明にその人物の顔や性癖を描写する方法もある。たとえばシェークスピアは、その人物が思いがけなくも発する言葉で、みごとに性格を浮き彫りにしてみせる達人であったし、モリエールも同様である。あるいはまた漱石の『坊ちゃん』に見るように、始めから主人公の性格を喝破してみせ、さらにその主人公の口から他の登場人物たちの性格までも一気に説明して、以下の物語の展開に大きな指標を与えるという手法を効果的に使った例も思い出されるだろう。

バルザックもまたさまざまな登場人物の描写の中で、それぞれ物語の展開に応じた書きざまを示して、千変万化の手法を用いている。この『結婚財産契約』という作品においては、まず父親の生涯を簡潔に語ることによって、ポールが抱えるド・マネルヴィル家の財産の形成のありさまと父親と母親との力関係が隠微のうちに語られ、それが息子ポールの人格形成にどれほどの意味をもつかを読者に予想させるような書き出しで始める。それでは父親が死んだ後に、ポールの以後の展開はどのようなものであるか。それが語られなければ、物語の筋の運びがスムーズにいかない。ポールは内気なところがある若者だが、その内気を意識するだけに、それが面に現れるのが怖くて、かえって向こう見ずな、大胆なところを見せようとする、いささか心理と相反する行動を、われにもあらずしてしまうタイプの人間であることを、語り手は物語の冒頭から密かにほめかしていることになる。以後の物語の展開を見れば、この主人公ポール・ド・マネルヴィルのこの性格が、どれほど大きな結果を生むか、つくづく作者の細密な構築に驚嘆することになるだろう。

Ⅲ 地方貴族への道

1810年、16才で父親のもとに連れ戻されたポールの生活はどういうものだったのか。

彼は牢獄同然に父親の古い邸宅に閉じこめられた。というのも彼には金がなくて町の若者とつき合うことができなかったのだ。彼はただ指をくわえて連中の楽しみを見ているだけだった。老貴族は息子を毎晩古ばけた馬車で連れ出した。古いぼれの馬で馬具もひどく、乗っているのは年寄りの従僕たちで、服もみすぼらしい。行く先は王党派の集まりで法服貴族や軍人貴族の生き残りばかりだった。⁽¹⁵⁾

ここで「古い」vieux という文字が執拗に現れるのは何故なのだろう。ヴァンドームの学

(15) Ibid.

寮から帰ってきたポールは、若い友人たちとの共同生活を楽しんできたに違いない。しかしまたそうした若い生徒たちに口やかましく注意したり、監視したりする老修道僧も多くいたはずで、「古くさい」*vieux* とさんざんに同じ若い仲間達と罵っていたことだろう。それがそうした若い友人と離れて、老いた父親と古めかしい城の中で暮らさなければならぬ。そのポールの心情が *vieux* という語句を繰り返すことによって、さらにいっそう苛立つ。その心模様が浮き彫りにされるようだ。そしてまた、物語冒頭にその父親がノルマンディからポルドーの此の城に移ってきたときの状況を描いた文章、

ノルマンの貴族はベサンに持っていた領地を売り払ってガスコン人に成りおこせた。そうさせたのは美しいランストラックの城とその甘美な佇まいだが、それは妻の持ち物だった。

とあったのを思い起こせば、⁽¹⁶⁾そこから何頁も進んではないこの箇所、最初「美しいランストラックの城」とあったのが、「古い邸宅」*vieux hôtel* と形容されるのは、きわめて意味深いことのように思われる。もちろんそれは父マネルヴィルがこの地に移り住んできた時から、ずいぶん間が経ったことを示すものではあるけれど、いわゆる革命の後、価値観が若者と老人とですっかり変わってしまったことを、この *vieux* の形容詞の連続は表すのであり、かつまた父親マネルヴィルのいかに吝嗇家であるかをも強調する指標ともなる。すなわち古い邸は、手入れに金をかけていないこと、さらに、それは牢獄にでも入ったようだと感じるポールの心情にも表れているだろう。その上にまた古い服装の老僕たち。これは若い召使いが雇われないことを示し、十分な手当を払っていないことをも示す。そして馬も替えることなく、馬具も同じ。それに乗る馬車も古い。これらの「古いもの尽くし」は、そのまま老人の頑固な守銭奴ぶりを遺憾なく伝えるだろう。また息子を連れて訪れる町の社交界も、古い体質の、帝政時代の影響を蒙らないような旧態依然たる貴族たち、となると、青年ポールの精神的バックグラウンドも理解できるはずだ。ポール・ド・マネルヴィルがパリやヴァンドームの学寮で呼吸してきた帝政貴族の新興世代としての生き生きとした感覚、一応は革命精神を受け継いで、進取の気分にあふれたものが、ここでは反発の対象となって、ナポレオンは野望溢れた篡奪者としてしか認識されないのである。

しかし老人が毎晩息子を古い馬車に乗せて王党派の社交界に連れて行く、そのことはすなわち財政的には締め付けていながら、一人息子には大いに期待して、かつ自慢の種としていたことをも示すだろう。つまり自己の財産の相続者として期待していたことにもなる。した

(16) *Ibid.*, p.527.

がって、ボルドーのブルジョワたちが、浮き沈みの激しい海上商業で潤い、地道な収入を基本とする土地貴族たちを後目に、謳歌する繁栄に対して、王党派の集まりは、旧貴族の生き残りの一種の示威行為に他ならず（それゆえにこそ、父マネルヴィルは古い馬車をわざと駆ったのに違いない）、その政治的な社交の世界で、そんなことなど何一つ悟らぬポールは、ひたすら退屈な時間を過ごすことになる。ここにもまた、後のポールの社交の拙さ、その機微がわからぬままに疎外されて浮いていく未来が、巧みに暗示されているのである。

父マネルヴィルは息子ポールに旧貴族のしきたりを教え、射撃、テニス（ポーム）を仕込む。それ以外は息子は前世紀の「ロマン」、旧体制下の長い恋愛物語を読んで退屈を紛らわせた。そして、「これほど単調な生活が続けばこの若者も息が詰まって駄目になっただろうが、父親が死んで、ようやくその圧制から解放されることになった。」⁽¹⁷⁾ お金が乏しいものと思い、じっと我慢させられていた息子が、押さえつけていた父親がいなくなればどうなるか。その答えはおのずから明らかだろう。ポールは相続の手續きが無事に済むと、残された資金で年利の入る手だてを取り、不動産は父親の有能な公証人であるマティアスに管理を任せて、ボルドーを離れ、最初はナポリの大使館の館員をし、さらにマドリッド、ロンドンとわたり、ほぼ6年間にわたってヨーロッパ各地を巡った後、パリに舞い戻った。

しかし父親がせっせとため込んだ資金をほとんど遣い尽くすところまで行けば、老実な公証人マティアスが徴収、運用してくれていた土地管理収入に手を着けなければならない。お定まりのように、この危機的状況にいたって、ポールは、「ボルドーに帰り、事業を自ら行って、ランストラックの城で貴族としての生活を送り、領地を改良し、結婚して、いつかは代議士にでも打って出よう」⁽¹⁸⁾ という、いわゆる地方貴族としての「真つ当な考え」に立ち返った。バルザックの『人間喜劇』の青年主人公のほとんどが陥る道筋に、彼もまた同じように進み始めることになる。それにはまず適当な女性を探して結婚することが肝心だ。さて結婚ということになると、当時の女性について、また結婚について、ポールはどう考えたか。

たしかに多くの女が望んでいるのは結婚するなら肩書きだが、それ以上に相手の男と仲良く親しみ合えることだ。ところでポールは70万フランを6年で食い尽くした代わりに、そうした資格を手に入れていた。これはそんじょそこらで売られているようなものでなく、両替商よりも価値がある。というのも、この資格は同じように時間をかけた勉強と、修行とさまざまな試験を経るもので、知識も必要ならば、友達も、敵も必要で、またある種の姿恰好、物腰の上品さが要り、名前も口にしやすい優美でなければならない。つまりこの資格は大いにもてもするが、決闘沙汰もあり、競馬で敗けて、がっかり

(17) *Ibid.*, p.529.

(18) *Ibid.*

することもあれば、うんざりすることも、苦勞もあり、快樂も中途半端なものとするのだ。ポールはつまりは粋な男^{エレガント}ではあった。が、馬鹿馬鹿しく使い込んだわりには、彼は当世流行の男にはなることはできなかつた。⁽¹⁹⁾

ポールの人となりと、彼が過ごした6年間の性格が、改めて検証されている。ここで「そうした資格」と訳した *cette charge* という語は、いわゆる任務、請け負う仕事という意味だが、同時に資金を注入しての事柄という意味もある。そしてそれは *charge d'agent de change*, すなわち株式仲買人の仕事に匹敵するというわけだ。株式仲買人はいうまでもなく株や年金の売り買い、また外国通貨や金などをフランス金貨に換えてその手数料で稼ぐ商売で、もちろんブルジョワの仕事、法的な資格のいる仕事である。ポールはいわば6年間あちこち遊び回ったことで、そうした仕事につく修行とおなじような経験をしたはずだと言うのだ。

出版年代は書かれていないが、おそらく1850年代に執筆されたと思われる『職業総覧、あるいは家庭で子弟の地位を選ぶ際のガイド』という長いタイトルの辞書体の本に「株式仲買人の資格は80万から90万フランというところだ」とある。⁽²⁰⁾ この記述がされるのは時代が少し下ってからであることを考えると、まさしくポールが6年間で費やした金は株式仲買人としての資本金とほぼ同じくらいになるわけで、ここにそうした比喩が出ることはバルザックのこうした方面における知識の確かさを窺わせるし、また当時の読者にとってもきわめて適切な比喩であることがわかる。

株式仲買人 *agent de change* を説明して、「時間をかけた勉強と、修行とさまざまな試験を経るもので、知識も必要ならば、友達も、敵も必要で、またある種の姿恰好、物腰の上品さが要り、名前も口にしやすい優美でなければならない」*exige aussi de longues études, un stage, des examens, des connaissances, des amis, des ennemis, une certaine élégance de taille, certaines manières, un nom facile et gracieux à prononcer;* (イタリックは筆者による)と重ねられていく数々の名詞は、それこそ法的資格を取るための順序、さらに事務所を立ち上げてからの顧客獲得の順序をじつに要領よく示すものだが、いかにも当時のブルジョワたちの仕草までが髣髴とするような表現は、バルザックの独壇場といってよかろう。こうした苦勞の末、経験の挙げ句に、「ポールはつまりは粋な男ではあった。が、馬鹿馬鹿しく使い込んだわりには、彼は当世流行の男にはなることはできなかつた。」と書かれるのは、いかにもポールのふがいなさを印象づけるかのようである。そしてまたそういう投資をした

(19) *Ibid.*, pp.529-530.

(20) *Dictionnaire universel des professions ou guide des familles pour les diriger dans le choix d'un état pour leurs enfants*, par Victor Doublet, moraliste, Versailles, Victor Doublet, fils, s.d.

結果、ポールが得た「女性が親しみを感ずるような」「資格」を、こうした株式仲買人 *agent de change*、すなわち価値交換の代理人という仕事に等しいとするところに、これからのポールの結婚生活で負わされる役割というものも暗示されることになる。

エレガントな男になったというだけで、(ここで「つまりは」*enfin* という一語がよく効いている)「当世流行の男」*un homme à la mode* とならなかった、というのは強烈な皮肉だ。ア・ラ・モードとは、まさしく時の風を受けた男で、ポールが多大の投資にもかかわらず、颯爽として抜け目無いダンディと成り得なかったことが冷然として浮かび上がってくる。つまりある程度社交人としてのえげつなさはあるけれども、徹底的に悪になりきれず、どこか人の良さをのこしている人物がポールという男なのだ。その男が友人として最も親しいのが『人間喜劇』において、最もしたたかなダンディ、アンリ・ド・マルセーと来れば、彼がマルセーに持ちかける相談も、どのようにあしられるかは想像できるだろう。マルセーは郷里に帰って結婚するというポールに次のように忠告する。

田舎で馬鹿騒ぎをすればいい。へまなことをやれば、もっといい。たぶん人に知られた男になるだろう。だけど…結婚はするな。誰が結婚など今時するんだい？商人が資本金を増やして得をしようとか、二人で鋤を引っ張ろうとか、百姓でたくさん子供を作って働き手を自前で調達しようとする手合い、両替商とか公証人とかで必要な金の支払いに困っている連中、不幸な王室で不幸な王政を続けて行こうとする輩じゃないか。僕たちだけがそうした荷鞍を置かないで済むんだ。だのに君はわざわざそうした馬具で身を固めようというのかい？⁽²¹⁾

いかにもマルセーらしい直截な言い回しで、効用としての結婚を鮮やかに喝破する。しかしこのマルセーの言葉には、小説のポイントとなる要素が、実はさりげなく、しかし示唆的な形で忍び込ませてあることに注意する必要がある。*folies* は大盤振る舞いの馬鹿騒ぎ、もちろん狂気の沙汰、という意味が含まれている。「へまなこと」*sottises* は馬鹿な行い、間拔けた所行をも指すから、単に結婚するという将来に対しての忠告と同時に、まさしくその先に待ち受けるポールの結婚の後をも想像させるはずだ。また「人に知られた男」*célébrité* は当時の貴族たちの望むところであり、ポールも他の人にもまして *célèbre* 「有名」でありたい気持ちを露わにしたこともあっただろう。まして文字どおりの *célèbre* であるマルセーを前にしては。そして結婚の目的としてそれぞれの階級で求めるもの、財産の積み上げであったり、子作りであったり、さらには株、公証人といった、ついさきほどポールの行状に

(21) *Ibid.*, p.531.

ついで書かれた文章を思い起こさせるような職業が重ねて口にされたり（ポールが自己の不動産の管理を老公証人マティアスに託していることを思い出そう）、そして一家系の存続をはかるための結婚として王族の例が出されるが、これはボルドーの一領主の家系存続も、規模は異なるけれども本質は同じであることを示唆するものに他ならない。最後にマルセーが言う「僕たちだけがそうした荷鞍を置かないで済むんだ。だのに君はわざわざそうした馬具で身を固めようというのかい？」という言葉は、老父マネルヴィルに仕込まれて、馬術の鍛錬に怠りなかったポールのもっともポールたるところ、いわば彼のアイデンティそのものをじつに巧みに暗示して、マルセーの機知の豊かさをも知らしめる。まことに台詞の妙というべきだろう。

さらにマルセーは結婚の不利を説き、父親となることの馬鹿馬鹿しさを強調する。こうしたマルセーとポールの結婚をめぐるやりとりは、当時の貴族社会、あるいはバルザックの政治、倫理、社会観を示すものだ。もう少し詳しく見ていくことにしよう。

マルセーに結婚の愚を諭されたポールは、この現在の社会を動かして動じないのは、マルセーのような一種の個人の天才だとして、「僕はマルセーにはなれないよ。(略) 良き父親であり、良き夫、中道派の代議士で、おそらくは貴族院議員になる」と凡俗の貴族でいることに満足すると言う。一方のマルセーの結婚論は、『人間喜劇』随一のダンディにして蕩児、かつ冷徹なりアリストの理論として一顧するに値する。

結婚してしまうと、失敗したら、取り返しがつかない。愛人ならいちど決めたことが不利だと分かれば女を引き返させることもできようが、この退却は亭主にとってはワーテルローなのだ。ナポレオンのように、亭主は常に勝利していなければならず、いくらたくさん勝ち続けてもひとたび一敗地に塗れれば、その地位をひっくり返されることになる。女はあれほど愛人の執着を嬉しがり、腹を立てられてうっとりとなるのに、それが亭主となると暴力だ、と言いつのる。独身者はどこでも好きな陣地を選べるし、どんなことでも出来るが、主人ともなればすべて禁じられている。そしてその戦いの場を変えることはできない。おまけに戦いは立場が逆になるのだ。妻はしなければならぬことを拒否しようとする。ところが愛人となると、しなくていいことをしてくれるのだ。⁽²²⁾

さらにマルセーはポールに『民法典』について考えたことがあるか、と問い、自分は法学部など足を踏み入れたこともなく、民法典を開けたことさえない、とうそぶく。しかし、と彼は言うのだ。それがどのように適用されるかは、生きた社会で分かっている、と。そして

(22) *Ibid.*, pp.535-536.

こう付け加える。

僕は法学者だ。臨床教育指導の医者が医者なのと同じ意味でね。病気は医学書の中にあるんじゃない、病人の中にあるんだ。『民法典』は、ねえ、君、女性を被保護者扱っている。未成年、子供みたいに扱っているんだ。ところでどうやって子供を支配する？⁽²³⁾ 怖れによってだよ。

こうして、本来民法では被保護者、未成年扱いであるはずの女性の力が、じつは現実にはきわめて強く、夫はその妻を支配していくためには、力で押さえるしかない、恐怖で支配するしかない。ところが夫にはそのことによって、専制者とか暴力夫とかの汚名が着せられて、結局は妻の言いなりになるしかないことになる。法律には妻が夫の支配下にあることが明記されているが、じっさいの実社会の運用は、まさしく実社会での運用による、というわけで、さてこそマルセーの出番もあるわけだ。彼が言う夫 *mari* と愛人 *amant*、妻 *femme* と愛人 *maîtresse* との相違もまた正しくその喝破したとおりにちがいない。『人間喜劇』の人間模様はこうした結婚した男女と非婚の男女のせめぎあいから生まれるのである。ポール・ド・マネルヴィルとアンリ・ド・マルセーとの間で交わされる問答は、ポールとアンリの性格を見事に描き出すとともに、19世紀フランス、とりわけパリの貴族社会の結婚生活の実態を示して遺憾がない。しかも、マルセーの言葉は、ポールが故郷ボルドーに帰って行くはずの結婚の推移をうかがわせる、きわめて重要な伏線ともなっているのである。

IV エヴァンジェリスタ母娘

ポール・ド・マネルヴィルは1821年の冬、故郷ボルドーに戻る。彼は1794年の生まれとなるから、折しも27歳。自分の館を修復し、土地の王党派貴族たちの社会に人気者として迎えられる。

彼の生き方、物腰、パリでの教育が、ボルドーのフォブール・サン・ジェルマンの人々を魅了した。ある老侯爵夫人はかつて宮中で使われていた表現を用いたが、これは「美形」や「伊達男」がその青春花盛りの頃を指す表現で、彼らの言葉や作法がその場の決まりとなるのだった。老侯爵夫人はポールのことをその「花形」と言ったのである。⁽²⁴⁾

「花形」*la fleur des pois* というポールに老侯爵夫人が付けたあだ名が、最初この作品が

(23) *Ibid.*, p.536.

(24) *Ibid.*, p.537.

世に出た時のタイトルとなっていたわけだが、単なる伊達男、ハンサム、あるいはダンディとは違って、昔風に「花形」という表現が使われるところに、ポールのやや古風な今風でない特徴さえ暗示するようになっていく。それを確認するかのようには、語り手はポールのいかにも2流どころの「花形」としての性格を、以下に細かく描いていく。愛想の良さと鋭くはない皮肉、中途半端な女性のあしらい、「彼が交わす女性たちとの会話は彼女たちの好む尊敬した態度で、それほど知らん顔でもなく、うち解けたものでもなかった」とあるのも、⁽²⁵⁾ ポール・ド・マネルヴィルという男の、好まれはするものの愛されることのない姿をよく写していると言えよう。彼は残された財産のかかなりの額をボルドーの館とランストラックの城の修復に費やしたために、以後財布の紐を締めて、いよいよ地方での貴族の生活をそのまま維持していくためには結婚がどうしても必要だと考え始める。そしてその相手は日頃ひそかに結婚したいと思っていたボルドー社交界の女王エヴァンジェリスタ嬢だった。

エヴァンジェリスタとはどういう女性なのか。その肝心の娘の話よりも、まず彼女の母親の話が詳しく語られるのは、それだけその存在感が以後の物語の展開に示されるからである。金持ちのスペイン人がその妻と娘を伴ってボルドーの町に住み着いたのは世紀の始め。夫の莫大な財産についてもだが、何よりもボルドー社交界で目を引いたのはその妻だった。

クレオールであり、奴隷たちに^{かしづ}傳かれた女性ならそうであるように、エヴァンジェリスタ夫人は例のカサ・レアル家、スペイン王家に繋がる有名な一族であり、貴族夫人として暮らしてお金の価値を全く知らず、それだから自分の気まぐれな思いつきをまったく抑制しないでいた。これはずいぶん金が掛かるが、それはいつでも彼女を恋する男が満足させることになった。男は女には大抵どうやってお金を工面したかは内緒にしているものだ。⁽²⁶⁾

クレオールの語源は、スペイン語の *criollo* あるいはポルトガル語の *crioulo* で、「育てる」、という意味から「邸内で育てられた」と発展して、植民地に住み着いたヨーロッパ人の子女を指すようになる。エキゾチックなニュアンスといささか差別的な意味をも合わせ持った言葉で、クレオールが文学に登場するのは、19世紀の初めあたりからとくに盛んになり、ロマンティック時代の一つの特徴ともなった。エヴァンジェリスタという名前について、アルベール・スゴン *Albert Second* が1886年に書いた『思い出の抽斗』に次のような話が載っている。彼とバルザックがアングレームで定期便馬車について聞きに行った、その途中でのエピソードだ。

(25) *Ibid.*

(26) *Ibid.*, p.538.

その定期馬車の事務所からそれほど遠くない所に一軒の薬屋があった。その看板は今も目を閉じると目に浮かんでくる。四角の板で、緑色に塗られ、その真ん中にくっきりと黄色い文字が30センチほどの高さで、つぎの2語を並べていた。

エヴァンジェリスタ、

薬屋

(略) その看板を見るやいなや、バルザックははたと舗道の真ん中で動かなくなった。「エヴァンジェリスタ! エ・ヴァン・ジェ・リス・タ」と音を区切って発音して大喜びだ。この綴り字のひとかたまりが、どうやら彼の鼓膜を撫でて、じつに甘美なメロディとなるようだった。たしかにこの名前は彼を惹きつけ、魅惑した。ちょうど後になって彼を惹きつけ、魅惑したZ.マルカスの名のように。これが『結婚財産契約』で見いだされることになるのだ。⁽²⁷⁾

Z.マルカスはレオン・ゴズランのいうところを信じれば床屋の名前だった。⁽²⁸⁾ エヴァンジェリスタは薬屋という。果たしてこれを信じていいのかどうか分からないが、クレオールの名花エヴァンジェリスタと薬屋とのアンバランスな感じが、Z.マルカスという不思議な物語と理髪屋という変哲もない職業とのミスマッチで面白いのと同じ効果を出すことをねらったものであろうか。

しかし、エヴァンジェリスタはエヴァンジェリスト *évangéliste* と音で繋がる。神の福音を尊重する、ということで、神々しい名前になる。この神々しさ、いかにもスペイン風の名前がバルザックに気に入ったのかも知れない。とはいえ、その意味と音が、どれほどそうした名前を持つ人物と係わるのか、そのことをこそ深く問うて、いたずらに淵源のエピソードに惑わされることのないようにしたいが、ただこのエピソードでバルザックがエヴァンジェリスタの名前をいちいち音を区切って読んだ、とあることはいささか興味を引く。スゴンはÉ-VAN-GÉ-LIS-TA、と読んだというが、音はそうであっても、目に入る文字はもちろん福音的な象徴的音韻のはずだ。けれども同時に *Eva*, *Angélique* 「イヴ」「天使の」といったものが入り、*sta* というのは～である状態のままである、というラテン語でもあるから、そうしたく意味の派生)を、バルザックの目が読みとっていた可能性はあるだろう。カーサ・レアルという名前もじっさいにこういう家があったかどうかは分からない。おそらくエヴァンジェリスタという家名同様、架空の名前だろう。⁽²⁹⁾ レアルという名前はスペインの王族にある

(27) Albert Second, *Le Tiroir aux souvenirs*, Dentu, 1886, p.16.

(28) Léon Gozlan, « Balzac en pantoufles », in *Balzac intime*, Librairie illustrée, s.d., p.70.

(29) サン＝レアル *Saint-Réal* (1639-1692) という作家は実在して『1618年ヴェニス共和国に対するスペイン人の陰謀』*Histoire de la Conjuration des Espagnols contre la République de Venise, 1618 (1674)* という作品などを残している。

名前というから、それを元にして作り上げた家名ではなかろうか。

エヴァンジェリスタ夫人はそのエキゾチックな美貌と性格でボルドーの紳士たちに圧倒的な力を誇り、夫もそのことを喜んでボルドーに大きな邸を買ったが、彼は1813年に死んでしまう。1813年はちょうどポール・ド・マネルヴィルの父親が死んだ年代と同じ。つまりポールと後に彼の妻となるナタリー・エヴァンジェリスタとは同年に父を亡くしたことになる。彼女の母親はその時32歳。娘は11歳。莫大な財産と美貌で世間の注目を浴びるのは当然だ。ポールはこの時25歳になっているはずである。

しかし王政復古の新しい時勢となっても夫人の生活は変わらず、その豪華さとは裏腹に、内の経済は彼女の奔放な生活を反映して心細くなっていた。良い婿でもあれば、と思っている母親のところに結婚の申し込みはなかなかない。というのもその娘というのが、

いつも若い女の気まぐれを満足させるのに慣れて、エヴァンジェリスタ嬢はカシミアの衣装をいくつもまとい、宝石を身につけて、豪華絢爛のうちに暮らしていたから、思惑をもって近づこうとするものも畏れをなした。どこでも、その当時、子供たちもまた計算して動くのはその親たちと変わりなかった。(略) ナタリーが舞踏会に到着すると、彼女たち(一家をたばねる母親、孫娘たちをなんとかしようとしている老貴婦人、ナタリーに嫉妬する娘たち)に、誰か求婚者の一人が「これは、また、なんと美しい人だ！」などと、恍惚とした讃辞を漏らすのが聞こえると、「そうですね」とその母親連中が答えることになる。「でもあの人は豪勢な代物ですよ」⁽³⁰⁾

「あの人は豪勢な代物」と訳した語“*elle est chère*”は、もちろん高い、という意味で「高くつきますよ」というのが本来の訳だろうが、*chère*にはまたそれだけで豪勢なご馳走と言う意味もあれば、「いとしい」、「大事な」という意味もある。そうした意味が複雑に絡んだ皮肉な語法であることは、一読すれば理解できよう。ここで敢えて「豪勢な代物」といった訳語を使ったのもそうした意図からだが、じっさいエヴァンジェリスタ嬢は、そういう贅沢な代物だった。

カシミアはインドのカシミアール地方特産の織物。軽くて風合いの良いものなので高級で、めったに着られるものではない。ふつうは母親からのお古をもらって大事に着るものだ。⁽³¹⁾それをエヴァンジェリスタ嬢は何枚も持っている。まさしく *chère* というべきだろう。こういう女王がいるところにポールがパリから帰ってきたのだから、当然皆の目は二人の結びつき

(30) Balzac, *op.cit.*, p.539.

(31) 「いとこベット」で、ユロ男爵夫人アドリーヌが、その娘オルタンスに譲ったカシミアのショールに、アドリーヌのいとこベットが嫉妬する場面でもそのことが窺える。

に注がれることになる。ポールは舞踏会でエヴァンジェリスタ嬢に会った時、ちょうどエヴァンジェリスタ夫人が「この人をうちの婿にしよう」と思ったように、ポールもまた「この人を僕の妻にしよう」と心の内に呟いたところだった。

エヴァンジェリスタ夫人が「この人をうちの婿にしよう」と感じたことは、以下の展開にきわめて重要だ。というのもエヴァンジェリスタ嬢もポールに惹かれたことは書かれているが、結婚のことを思うのはエヴァンジェリスタの母親であることを明らかにするからである。エヴァンジェリスタ嬢は家の財政状況は何も知らない。夫人はある程度、かつての財産が自分の浪費のために残り少なくなっているのを知っている。一方のポールもまた、自分の財産がヨーロッパ漫遊によって少なくなり、かつ邸や城の補修に相当目減りしたことを知る。しかもポールにはエヴァンジェリスタ家が莫大な財産家である、という子供時代に植え付けられた思いがあって、子供の目で見たまばゆいばかりの財産の状況は、大人になってかえってその実像を見えにくくさせた。両者はそれぞれの財産不足を埋め合わせに足る相手を探しお世話するというつもりなのだ。ナタリーはひたすら豪華に飽きずに遊んでいるだけの娘で母親べったり。ポールが相手にしなければならないのは、エヴァンジェリスタ夫人ということになる。

ではエヴァンジェリスタ夫人はどういう人物か。

40歳でも、エヴァンジェリスタ夫人は美しかった。ちょうどあの素晴らしい沈む夕日が夏の日に雲一つない空を光の輪で覆う観があった。文句の付けようのない名声は、ボルドーの一堂には果てしない噂話の好餌となり、女たちの好奇心がいや増したのも、その寡婦が示す体つきのさまざまな特徴で、いわゆるスペイン女性やとりわけクレオールCreoleの女を名高くしたものだ。すなわち黒い髪、黒い目、そして足と背恰好はスペイン女性のそれで、弓なりに反った背の動きはスペインではよく知られたものだ。相変わらず美しいその顔は、クレオールの色合いで、いきいきと躍動する様を描こうとすれば、ただモスリンの生地を緋に投げかけたものに比較するくらいだろう。それほど顔の白さが同じように色づいているのだった。⁽³²⁾

クレオールは先にも説いたように、フランス本国にあっては、一種特殊な人種と見られ、どこことなく淫蕩なイメージを持つ者と考えられていた。豪華さと下品さ、これが混交したものが、クレオールの人たちが蒙った一つの決まり切った、ステレオタイプの評判である。従って偏見の強い、保守的な地方の都市ボルドーでのエヴァンジェリスタ夫人の評判につい

(32) Balzac, *op. cit.*, pp.542-543.

でも容易に想像ができるだろう⁽³³⁾。謎めいた魅力と財産をもつ未亡人とその娘は、ボルドー社交界の光と闇を、一身に体現していると言ってよい。エヴァンジェリスタ夫人は「世界中でもっとも素晴らしい女性に見えるが、じつはその性格に恐ろしいものがあって、それはカトリヌ・ド・メディスの金言によってしか説明しえないもだった。すなわちく*Odiare e aspettare*, 憎んで、期待せよ⁽³⁴⁾』と紹介されている。

噂によれば、エヴァンジェリスタ夫人はある男にぞっこんとなったが、その男はやがて慙慙にその関係を断った。彼女を袖にしたその貴族は、彼女のいわゆる *jettatura* (邪視) によって、大臣や貴族院議員の地位から落とされて、破滅の道を辿った。イタリア語で夫人の特徴として *jettatura* (邪視) が語られていることは、彼女の強い妬視の性格を示すだろう。その強い意志と自己への強靱な自信が彼女を支えているのである。その彼女がポールを見込んだ。夫人はたちまちポールの性格を見抜き、自分の娘の婿にしたいと考える。ポールの母方にモランクール家があって、彼らはパリの上流社会のあつまるフォブール・サン・ジェルマンの有力な一族だから、ポールを介してパリの上流社交界への足がかりを得ることも狙いの一つ。ボルドーの地に住み着きそこで君臨するだけで満足していたわけではない。パリというはるかに大きな新しい舞台がポールによって準備されることを期待するのである。野心家のエヴァンジェリスタ夫人のポール取り込みの作戦がいよいよ始まることになる。

エヴァンジェリスタ夫人は、さらに娘の夫を支配する利得が一つならずあった。ポールは当然のことながらこの女性に屈従することになったが、彼女がいかにもこれっぽかりも彼を支配しようなどとは思っていないように彼には見えたから、いっそうポールを支配した。夫人は自分の支配力のすべてを使って自らを大きく見せ、娘を大きく見せ、さらに自分の家にあるものすべてが価値があるように見せた。何よりもまず優位に立って男を支配し、彼を使って自らの特権的生活を維持していこうとしたのだ。ポールは自分を価値あるものといっそう思いこんだ。母娘に評価されたからだ。彼は実際よりもはるかに気の利いた男と信じこんだ⁽³⁵⁾。

ポールがまさしくエヴァンジェリスタ夫人の術中にはまることになるのがよく分かるこの文章で、注目すべきはエヴァンジェリスタ夫人の描写である。

これまで引用してきた彼女の描写を今一度見直してみよう。まず51頁で示した引用で、彼

(33) ジョルジュ・サンドの出世作『アンディアナ』*Indiana* (1832) で、主人公アンディアナも旧ブルボン島、現在のレユニオン島の生まれで、この地を舞台にした情念の物語が展開する。ついでに言えばバルザックの弟アンリもクレオールの未亡人と結婚してパリに戻ってくる。

(34) Balzac, *op. cit.*, p.544.

(35) *Ibid.*, p.545.

女は夏の夕暮れを赤く覆う太陽に例えられ、つぎには「世界中でもっとも素晴らしい女性に見えるが、じつはその性格に恐ろしいものがある」とされ、さらに「つねに人が従って来ていた彼女は、王位にある人すべてに似ていた」が、しかしまた、「恐ろしく、情け容赦のないものとなる」。というのも「彼女はけっして許すことはなかった。彼女は自分の憎悪の持つ力を信じていた。その力で作り出した不運が敵に襲いかかるのだ。彼女はその破滅的な力を例の男に発揮した」とも書かれている。

さらにエヴァンジェリスタ夫人が「娘の夫を支配する (s'emparer) 利得が一つならずあった」とか、ポールが「必然的にこの女性に屈従する (nécessairement captivé)」が、それというのも「彼女がいかにもこればかりも支配しようなどとは思っていない (ne pas vouloir exercer le moindre empire sur lui) ように」見せることによって、「いっそう彼を支配した (le captiva)」とあり、彼女が「自分の支配力のすべて (tout son ascendant) を使って」、「何よりもまず優位に立って男を支配し (dominer par avance l'homme)」など、エヴァンジェリスタ夫人がどれほど権力的で、支配することに執着しているかを、くどいほどに書き記すのだ。これは小説の書き方からいえば、評価しがたいと考えることもできようが、しかしよくテキストを見てみると、ポールの描写と絡ませることによって、エヴァンジェリスタ夫人の位置が、表になったり裏になったりして、じつに巧みに彼女の表と裏が自ずから浮き彫りにされる仕掛けが見て取れるはずだ。

すなわち、先にその名前を分析したときに述べたように、エヴァンジェリスタ夫人は、まさしくバルザックが郵便馬車会社を出た時に看板を目にして、エ・ヴァン・ジェ・リス・タと区切って発音したエピソードそのままに、イヴとアンジュの混交した名前であると同時に、またエヴァンジェリスタと共通する音とともに、福音的な、幸福をもたらす女性の表の顔をもちながら、その名前の中にヴァンジェという「復讐する」(venger) 性格を隠しもっているわけなのだ。バルザックにおける *nomen est omen* 「名は予兆」は、ここにも現れている。そしてこうした深い仕掛けこそが、小説家バルザックの骨太な構想力と筆力を感じさせる所以にほかならない。

ポールがボルドーに落ち着いて1年、エヴァンジェリスタ母娘にびったりと取り込まれてしまっている。しかし彼女たちがポールにとる態度は、きわめて慎重である。

母親も娘も結婚など考えていないように見えた。エヴァンジェリスタ嬢は彼に対して一線を画した応対を守っている。貴婦人というものは魅力たっぷりであり、相手に愛想よく話しながら、しかもその親しさの中にきりっと一定の距離を保つものなのだ。こうしてはっきりと口にしないところが、地方の人間には全くといっていいほど珍しいので、ポールは気に入った。⁽³⁶⁾

これはいわゆる女性の「手管」というものだろうが、ここで「貴婦人」*grande dame*と書かれていても、エヴァンジェリスタは*grande dame*ではない。「貴婦人」を装う、あるいは「貴婦人」を模倣することによって手に入れた現在、ということはこの文章はよく示しているのである。一方のポールは、そうした「手管」に気がつかない。むしろそれこそ「貴婦人」の表れとして喜ぶのだ。彼はその母親が野心家でやがて恐ろしい専制者になることを予想もせず、ナタリーの邸を出る度に甘い空想に耽る。そうしたポールを描いて、

第一、彼はあまりに長い間自由な身を楽しんで、何の悔いも残らぬくらいだった。独り者の暮らしにも疲れていた。何も新しいことなどなく、ただ不便なだけだった。ところが、時には結婚生活の厄介さに思い至ることはあっても、むしろもっと喜びの方が頭に浮かんでくるのだ。すべてが彼には新奇なものだった。⁽³⁷⁾

とするこの文章は、いかにも年を取りかけた独身者の心理を穿ったものと言えよう。しかも普通の平凡な独り者の心理を、である。こういうところにもバルザックの非凡な描写の冴えを見ることができる。ポールにはエヴァンジェリスタ嬢が、彼の見知ったフォブル・サン・ジェルマンの貴婦人と、自分よりはるかに上手に、あるいは少なくとも同等の形で社交の上で、自分の手足となって働いてくれるように思われてくる。もちろん甘くなりがちな自己採点の折々に、かつてのアンリ・ド・マルセーの言葉が蘇る。

結婚前の男女は、結婚の楽しみに心奪われて、結婚後のトラブルなど考えないが、結婚してさまざまな苦勞が身にしみると、こんどは結婚のせいにする、とバルザックは書く。これもまた人間通の言葉だろう。ポールがナタリーの人格の本当の姿を見抜けなかったことを、語り手は次のように言う。

態度とか顔つき、言葉遣いあるいは身振りの中に、エヴァンジェリスタ嬢の何かを示すものを発見して、その性格からくる不完全な点が明らかになるのは、どの人間についても同じだろうが、そうするためには、ポールは単にラファテールやガルの知識を有するばかりでなく、さらに、いかなる教義要項にも存在しない知識、観察家としての、個人的であると同時にほぼ一般に通じる認識を必要とする知識を持たなくてはならなかっただろう。⁽³⁸⁾

(36) *Ibid.*

(37) *Ibid.*, p.546.

(38) *Ibid.*, pp.547-548.

ここにはバルザックのいわゆる「幻視家」としての個性がよく現れているように思われる。人の個性、性格はたとえばガル Gall (1758-1828) のような骨相学 *phrénologie* の創始者やラファテール Lavater (1741-1801) は、人間の肉体的特徴から割り出せるという理論を生み出し、かなりの信奉者を得た。バルザックもその一人ではあるが、ここにも言うように、単にそうした理論ばかりでなく、個人に由来する「観察の力」を最も重視していたことがわかる。⁽³⁹⁾

V 結婚の駆け引き

ポールはナタリーに結婚を申し込み、エヴァンジェリスタ夫人は我が事成れりと喜ぶが、そうなれば成るで、と彼女の夫が娘に残した財産を相当に使い込んでいるから、結婚に際しての婚資を含む結婚財産契約を結ばば、たちまちそのことが露見し自分は無一物になってしまう。ポールが結婚財産契約に触れて、マネルヴィル家の財産管理を長年委せている公証人マティアスの名前を出すと、エヴァンジェリスタ夫人はその対抗馬として公証人ソロネを呼ぶことにした。若くて坊ちゃん育ちのポールと誠実で経験豊かな老マティアスの若者・老練のコンビと、中年でしたたかな美貌の未亡人エヴァンジェリスタ夫人と若い野心的な公証人ソロネ、この二つの組み合わせは、この物語のもう一つの核を成すものでもある。

結婚申し込みの翌日、エヴァンジェリスタ夫人に呼び寄せられたソロネは、厳しい財政事情を打ち明ける夫人に、そんなことは何でもないと、ポールがナタリーに恋していることを確かめると、交渉の場には美しい服を着て、美しい化粧を施して出るよう忠告する。この二人のやり取りを見てみよう。

「私たち、とびっきり綺麗な装いをいたしますわ」

「契約の時のドレスは贈与の半分を決めますよ」とソロネが言った。⁽⁴⁰⁾

エヴァンジェリスタ夫人が「美しい装い」 *belle toilette* とせずに「綺麗な装い」 *jolie toilette* と言ったことに注意しておこう。*belle* は *jolie* よりも知的な感じがし、*jolie* の方にいっそう誘惑的な響きがある。そしてそれを受けた次の文章、

この最後のことがらが大きい必要だと思われたので、エヴァンジェリスタ夫人はナタリーの身支度に付き添うことにした。娘の状態を確かめることもあったし、また娘を自

(39) 『ファチーノ・カーネ』の中で、語り手とファチーノがそれぞれに幻視力を発揮するのは、ある意味で共通の能力でありながら、またそれぞれの個性によって、その見えるものが違うことが強調されている、と考えられるだろう。

(40) *Ibid.*, p.557.

分の財産の絡む陰謀に、彼女の知らぬままに共犯者に仕立てあげるためでもあった。セヴィニエ夫人風の髪に結び上げ、白いカシミアのドレスにバラ色のリボンを付けたものを着ると、わが娘ながらとても美しく見えて、彼女は勝利を予感した。⁽⁴¹⁾

ここでナタリーが「わが娘ながらとても美しく見えて」と「綺麗」*jolie*ではなく、「美しく」*belle*と書かれていることは先の説明と矛盾するようだが、そこにこそ夫人と娘の違いを表わす語りの仕掛けがある。母親は娘と彼女二人ながらに*jolie*と見せようと腐心する。ところが母親の思惑に与らぬナタリーは、さすがに*belle*と表現されるのだ。そのことはナタリーを「知らぬままに共犯者」*innocente complice*と書くところにも表れている。「何も知らない」*innocente*、だからこそ*belle*なのである。そのことはナタリーが纏う「白い」カシミアのドレスが証明するが、同時にそこに付けられたバラのリボンは彼女の内からのぞく官能を示すから、結局は母子ともに綾なす色合いを示していることになる。状況を巧みに示す鮮やかな筆致と言うべきだろう。

こうして化粧の最中にエヴァンジェリスタ夫人は娘に結婚財産契約を結ぶに当たって、どのように振る舞うかを指南し、家の財産状態について知らされていないナタリーは、母の態度をいぶかりながらも、母親のこの結婚に対する強い執着を知る。二人の会話を引こう。

「天使のような子だよ、お前はちょっと相手を誘惑するようなそぶりだけしてくれればいいんだよ。私たちには昔のカステイリアの誇りがあって、行き過ぎたことはしようとしてもできないのだから。ポール伯爵はいずれ私がどういう状態にあるか知るようになるけれどね。」

「どういう状態？」

「お前は何も知らなくていいんだよ。いいかい、もし、お前がその素晴らしい姿でいるのを見た後で、あの男の目にちょっとでもためらう気持ちが表れたら、そうしたら私ははっきり言うよ。ええ、すぐに何もかもご破算にして、私の財産を売り飛ばして、ポルドーを出るわ。そしてドゥエのクラス家に行く。なんて言ったって、私たちの親戚ですからね。テンニック家との繋がりです。それからお前を貴族院議員の誰かと結婚させるよ。たとえ私の財産をお前に渡すために修道院に引きこもらなくちゃならないにしても。」

「お母様、そんな不幸なことにならないために、どうしたらいいの？」とナタリーが聞く。
「お前がこんなに美しいのはこれまで見たことがないよ！もうちょっとコケットな感じ

(41) *Ibid.*

になるといいね、そうすれば万事うまく行くわ⁽⁴²⁾」

無邪気ではあるものの、母親との一体感がナタリーに強いこと、そして母親であるエヴァンジェリスタ夫人の娘に対する強力な影響力をはっきりと見せつけるやり取りである。夫人は娘の財産を自分が遣い尽くしていることを悟られてはならない。娘がマネルヴィルをすっかり虜にして、財産問題になんの条件も付けないうにすれば、すべてはうまくいく。彼女ははっきりとそのことを言わずに、ポルドーを捨てる、ということで巧みに悟らせているのだ。こうしてエヴァンジェリスタ夫人は娘ナタリーの身支度が完璧にできたのを見届けて、今度は自分の身支度に腕に縋りをつける。なぜなら娘はポールを虜にしなければならないが、母親はこの契約を扱うソロネの心をしっかりと捉えておく必要があるからだ。

やがてポール・ド・マネルヴィルの老練な公証人マティアスとエヴァンジェリスタ夫人が頼みにする公証人、功名心にはやるソロネの対決が始まる。もとよりこれは一種の代理戦争であって、エヴァンジェリスタ夫人の意図を汲んだソロネをマネルヴィル家の危機として老マティアスが迎えるのである。

夕食の後、全権委任された二人は恋人たちを母親の傍らに残すと、隣の客間に行って協議に入った。そこで二つの情景が展開された。大きい方の客間の一角では恋の情景が、人生のにこやかで楽しい様子を、またもう一つの部屋では深刻で陰鬱な情景が、赤裸々な利害が、華やかな人生の外観の下で演じる役割を既に果しているのだ⁽⁴³⁾。

同じ場所で、それぞれ老若の男女が対となって、お互い密やかに人生の大事を語っている。一方は表向きの結婚という華やかな事柄、また一方ではそれとはまったく裏腹の計算、その二つが同時進行している皮肉な様子が示される。客間の大きい方が表向きの交渉に向けられ、その横の小さい客間が真の意味での交渉が行われる場所となっている、といった細かい描写が、いかにもリアルに読者に強く印象づけられ、辛辣な、人生のコントラストが見事に描かれる。以下に繰り広げられる二人の公証人の議論は、かつてバルザック自身が公証人の事務所で働いていた経験を十分に活かしたものに違いない。

まずソロネが双方が相続人なく死んだ後はそっくり財産を相手に与えるが、そうでない場合に4分の1は用益権があり、4分の1は用益権のない所有財産としての贈与。そして夫婦の共有財産として総額は双方の持参額の4分の1、生き残った方が動産を持つ、と提案する。一見公平な契約のようだが、マティアスはまず双方の財産の中身の検討が必要だとマネル

(42) *Ibid.*, p.558.

(43) *Ibid.*, p.562.

ヴィル家の財産の一々を挙げて示し、エヴァンジェリスタ家の持ってくる財産の詳細を求めて追求する。

「一体何を持ってきてくれるんです？エヴァンジェリスタ氏が亡くなった時の財産目録はどこにあるんです？決算書は？資産の使い道は？資本金はどこにあるんです，資本金があるというのなら？お宅の不動産があるなら，それはどこです？要するに，後見財産の計算書を見せてください。そして娘さんにどれくらい母上から渡るのか，そうでなければその保証をおっしゃってください。」

「マネルヴィル伯爵はエヴァンジェリスタ嬢を愛していらっしゃるのですか？」

「妻に迎えようと思っていますよ。すべてうまく折り合いがつけばね。」と老練な公証人が言う。当方は子供じゃない。今は交渉事項を話している。好き嫌いが問題じゃない。」

「交渉は，もしそちらに寛大な気持ちがあれば決裂しますよ。(略)」とソロネが言い返した。⁽⁴⁴⁾

事の重大さを承知し，マネルヴィル家存亡の時とでも言うように，厳格にことを定めようとするマティアス。矢継ぎ早の質問が老練な彼の性格をよく表している。一方のソロネは終始曖昧な物言いで押し通す。エヴァンジェリスタ家の不如意をわきまえて，不利な立場を何とか有利に運ぼうと必死になっているソロネは，巧みに現実の金銭の問題を愛情の問題にすり替えようとする。そしてエヴァンジェリスタ氏の死後は財産目録を作っていない，スペイン人でもあり，クレオールでもあってフランスの法に従うことはないからと強弁し，娘の後見人である夫人は莫大な財産をロンドンから引き出して，パリに移し，利息を倍にしたと言う。マティアスはそんなごまかしには応じず，それでは相続にどれほど税金を払ったかと聞く。その額を知れば相続額も知ることができるのだ。

ソロネからエヴァンジェリスタ家の財政の実際を漸く聞き出したマティアスは，ナタリーと話しているポールに一言，二言，状況を説明に行く。ナタリーにポールが言いくるめられるのを警戒する意図もあった。老公証人がその場を離れたあとのソロネを描いて，「彼は静かな事務所でいろいろ戦略を練って資産を案配し，さまざまな提案を並べ立て，議論の筋道を立てて，勝負はすべてにおいて負けているように思えても，うまい具合に妥協が示されるなら，自分の顧客が勝ちになるようなポイント⁽⁴⁵⁾を準備してきていた」とあるのは，いかにもソロネの人柄を表して遺憾がない。エヴァンジェリスタ夫人の私財についての暴露戦術も，

(44) *Ibid.*, p.563.

(45) *Ibid.*, p.564.

すべてはここへ来るまでにソロネの練りに練った作戦ということになる。こうした若い戦略的なエヴァンジェリスタ夫人側の公証人に対して、正当な戦術で対抗しようとする老実なマティアスの人柄も二人の応酬で明らかになるが、財産をめぐる隠微な、激しい駆け引きを描いて、そこにソロネという若手の公証人のしたたかな計算を示した、そのすぐ後に、以下の文章が続くのは見事な作者の手腕である。

バラのリボンのついた白いドレス、セヴィニエ夫人風のカールした髪、小さな足のナタリーは、その利口そうなまなざしや、その綺麗な手で絶えず巻き毛を整えて乱れないようにする、こうした若い娘の手管はまるでクジャクが太陽に向かって羽を広げるようで、ポールをその将来の義母の思う壺にはまらせることになった。彼は欲望にボーッととなり、まるで中学生が娼婦を欲するように、この婚約者をわがものとしたと思うのだった。彼のまなざしは、はっきりと心の熱を映して、男が馬鹿を尽くすあの情熱の高みまで達していることを示していた。⁽⁴⁶⁾

ソロネ、マティアス両公証人の駆け引きと、それをまったく知らぬかに見える若い美人ナタリーの、その実、きわめて戦略的な仕草と、そこに表現されていない母親の存在。むしろナタリーの仕草の描写は、そのまま母親エヴァンジェリスタ夫人の視線をなぞるものかも知れない。そしてその手管にまんまと乗せられて有頂天になったポール・ド・マネルヴィルの凡庸さ。わずか数行のうちに、したたかな計算に裏付けられた二人の公証人の会話に浮かび上がる利害の深淵と、その機に臨んでなんらの危機感も抱かず、ひたすらナタリーの美貌に正体をなくしてしまう田舎貴族ポールの姿が、滑稽、皮肉な形で浮き彫りにされる。

あたかもその時、ポールは母親に彼のすべてを投げうって花嫁に尽くす、とまで言い出す。それをうまく利用して、エヴァンジェリスタ夫人は、結婚したら人の目の煩わしいこのポルドーの地を去ってパリへ行こうと提案する。ポールはたちまち同意して、友人のマルセーにパリでの邸宅を問い合わせることで約束する始末だった。パリでの滞在費までも思わず知らず引き受けてしまっている所で、マティアスがポールを危険な話の輪から引き離すことになる。

「伯爵」と老人が言った。「婚資は一文もありません。私が考えるに、話し合いは別の日にして、もう少し有利な立場を取れるようにしましょう。」

「ポールさん」とナタリーが言う。「私もあなたにちょっとこっそりお話したいんだけ

(46) *Ibid.*, pp.564-565.

れど⁽⁴⁷⁾」

マティアスの冷静な対応ぶりと、それを察したナタリーのポールへの甘えた話ぶりと。バルザックの描法がアナロジーとコントラストから成るのは『私生活情景』全体の構成においても検証されるが、ここでも見事なアナロジーとコントラストが織りなされていることに気づかされるだろう。老と若、男と女、美人と醜男、そして二人はなんの関連もないように見えながら、実は結婚の契約という点で、ぴったりと同じ策略的な動きをして、ポールを脇に呼んで、地方貴族に成りきってしまった彼を、己が陣営に巻き込もうとするのである。

ナタリーは母親の言葉をよく吟味し、その不安な様子から母親の困惑を悟り、さらに自分の立場を考えて、出来る限り自家の結婚を有利に進めようと心を砕く。それはそのまま、老マティアスがマネルヴィル家の困難を思いながら、誠実な交渉を試みることに通じるだろう。

ナタリーはポールにこう囁く。ここで見せるナタリーの話術もその母親におさおさ劣るものではない。

「ポール」とナタリーは小声で言った。彼女が彼をこう呼んだのは初めてだった。「もし何か損得のお話が難しくなって私たちを引き離すことになれば、あなたとのお約束はなかったことにいたしますし、またお別れすることで私を悪く思われても結構ですよ。」

彼女はこうした寛大な言葉をじつに重々しい感じで述べたので、ポールはナタリーが欲得利害に恬淡としていると思いきみ、またつい先程彼の公証人が打ち明けたばかりの事実を彼女が知らないのだと考えた。彼は娘の手を取ると、恋の方が損得よりもいっそう大事という思い入りで、口づけした。ナタリーは部屋から出た。⁽⁴⁸⁾

そこに展開されるのはナタリーの実に巧妙な話術である。自分の不利な状況を読みとると、これまで使っていたよそ行きの言葉遣いをやめ、初めて親愛を示す敬称抜きのファースト・ネームで呼ぶ。このことでポールはどれほど心を躍らせたことだろう。そうしておいて、次に重々しく、「もし何か損得のお話が難しくなって」*si quelques difficultés d'intérêts pouvaient nous séparer* と自己の家の不利をそれとなく匂わせる（大事なことは「不利である場合」と *si* を用いて言葉を濁しているところだ）、そして相手に事の判断をゆだねるのである。これは一見ゆだねるように見えながら、そのまま、相手が利害に聡いようなら相手と別れても仕方がない、と言っているわけで、じつは男の愛情を験していることになる。まこと

(47) *Ibid.*, p.566.

(48) *Ibid.*, p.567.

に巧みな論法というべきだろう。たちまちポールは相手の術策に陥って、恋こそ大事というそぶりを見せてしまうのだ。ここで「ポールはナタリーの欲得利害に恬淡としていると思いきみ、また今し方彼の公証人が打ち明けたばかりの事実を彼女が知らないのだと考えた」とあるところ、ナタリーの部分をポールに置き換えれば、事態の本質が明らかになるだろう。だからこそナタリーの去った後、すぐマティアスが駆け寄って、「なんてことだ！伯爵、あなたはとんでもない愚かなことをなさってますぞ」といっても、ポールの目が覚めることはない。

何食わぬ顔でポールに近寄ってきたエヴァンジェリスタ夫人に、マティアスがこの契約話には問題があると言い出した時、ソロネが飛び出して、エヴァンジェリスタ夫人の財産状況を説明し、彼女が何もかも売り払えば娘への返済もできるから、この話をまとめることができると提案。ナタリーの美しさに目が眩んで、彼女との結婚を望むポールにとって願ってもないことだった。しかしそのソロネの申し出に、マティアスは胡散臭さとポールの破滅を予見し、それを易々とポールが信じて一言も言い返さないことに憤然として立ち上がる。老若二人の公証人の行動を描いて、小説『結婚財産契約』の真の主人公は、ポール・ド・マネルヴィルやナタリー、ましてやエヴァンジェリスタ夫人などではなく、これら二人の姿の中に代表される公証人像、否、まさしくこの小説の題名通りに、「結婚財産契約」であることを明らかにする。

VI 二人の公証人

マティアスは交渉決裂を匂わして去ろうとするが、ソロネはエヴァンジェリスタ夫人に娘ナタリーの財産を確保するためには夫人の譲歩が必要だと説得し、マティアスの攻勢に対して、ひるまずに勝負を決するように暗に促す。

今、ポールが思案に耽って、再考する時間を与えれば、彼の不利な立場が理解されて彼女の方に不利な契約を結ばなければならなくなる。それどころか、当てにしていた結婚さえ破談になりかねず、そうなればよいよエヴァンジェリスタ母子の将来が立ち行かなくなる。なんとしても恋に浮かれているポールと彼女らの望むような結婚契約を交わしてしまわなければならない。エヴァンジェリスタ夫人が娘への贈与分を彼女の後見財産として運用している限りナタリーの持参金は全く無いに等しい。しかもその財産は不動産など彼女が手放さなければ娘のものにはならない。そのことを二人の公証人から指摘されて、夫人は寧ろ一か八かの勝負に出た。彼女は自分が財産を使い込んだとはっきり認め、こう付け加える。

それでもあの人には眉ひとつ顰めはしませんでした。あの方が死んでから、お金は始末するようになりましたし、きちんとした生活をしています。あの方は私に望んだのはそんな

なのではありませんけれどね。破談にしましょうよ、いっそのこと。マネルヴィルさんがそんなにお困りになっているんですから、私が⁽⁴⁹⁾...

つまり自分が生きていることが悪いのか、と正面切って開き直り、いかにも夫が妻の財産など当てにせず、その本人だけを愛することで満足した、と強調する。それはそのままポールへの当てつけとなって、ポールにずしりと響くはずの言葉だった。しかもエヴァンジェリスタ夫人が口にする「私の持参金は美貌と貞節と幸福と、家柄と教育」は、そのまま持参金を持たぬナタリーそのものである。そして亡くなった夫を引き合いにだして、暗にポールを責めた挙げ句、破談にしましょう！と爆弾を投げつける。

貴族の品位というものを考えるポールと、契約を無事終わらせてこそ役割を果たすことのできる公証人たちの面目。それが夫人の狙い目だった。ポールはたちまち折れようとし、マティアスはそれを押さえにかかると。そこでソロネの出番となる。彼は前もって打ち合わせた通り、エヴァンジェリスタ夫人がその邸と家具を売って、それと手持ちの口座の金をあわせてナタリーの持参金および彼女自身の生活費として、結婚後はマネルヴィルの家に同居し、ボルドーのランストラックの邸宅あるいはパリの邸に新婚夫婦と一緒に住むことを提案する。老練なマティアスはソロネの言葉に誤魔化されない。彼はソロネの持ち出した「幸福な新生活」を「ちっぼけな天国ですな *Un petit paradis*」と皮肉るのである。

マティアスが「ちっぼけな天国」というのは、ソロネの描く母親同居の新婚家庭に対する皮肉だが、同時に先にエヴァンジェリスタ夫人が嘆いて見せた「天国の夫」という表現を踏まえて、さらにワサビをきかせたものだ。夫人が自分の財産を犠牲にして、娘ナタリーのために譲歩したと思いきやポールがしきりに感謝したりするのを、マティアスはすでに破綻の第一歩と見た。昔から義母と婿とは犬猿の中とされる。その義母が新婚の家庭に入る「ちっぼけな天国」は、そうした嘘っぽい理想的な家族構成の欺瞞を突いてまことに辛辣。老公証人はソロネとエヴァンジェリスタ夫人がうまく示し合わせて、話を演出していることに気づいて、ポールが生まれる前から知っていたマネルヴィル家がこうした形で崩壊するのを眼のあたりにする予感がした。

この女の心の中にある意図が、凶悪でも、犯罪的でもなく、盗み、誤魔化し、詐欺、悪意といったものもなく、非難すべきものは無いにしても、それでもあらゆる犯罪の芽があるように思いながら、マティアスは痛恨も、義憤も感じなかった。彼は<人間嫌い>ではなく、一人の年老いた公証人であって、職業柄、世の人の巧妙な計算や強かで陰湿

(49) *Ibid.*, p.571.

な裏切りには慣れていた。それらは大道での殺人によって、おおっぴらにギロチンに架けられる哀れな奴のそれよりも陰湿なのだ。上流社会にあっては、その生きていく道、外交的な会合は、あたかも各自が汚物を捨てる恥ずべき厠のようなものなのである。⁽⁵⁰⁾

表向きは、まったく犯罪的なところがなく、悪意さえも認められない人間の持つ「犯罪の芽」を鋭く洞察する老練な目。「大道での殺人よりも陰湿な犯罪」に対する考えを、若い公証人ソロネではなく、老練なマティアスに吐かせるところに作者の優れた才を見ることができらう。青年法曹家なら、こうした義憤は文字どおり青臭い正義感ということにならう。しかしマティアスはあまりにこうした現実を見慣れてしまった。だからこそ「義憤も痛恨も感じなくなって」いるのである。

マティアスの沈黙が何を意味するのか、同意を求めたくて仕方のないポール、マティアスの真意を知りたいソロネとエヴァンジェリスタ夫人。この3人の視線は自ずから彼に集中する。マティアスは、彼らにポールとナタリーの財産はせいぜい3対1の割合でしかないと言う。しかもポールの財産は不動産を主体とするが、ナタリーの場合、有価証券や建物を売った現金しかない。「私は年を取ってこれまで十分見てきました。お金は減るが土地は増えるんです」とマティアスは契約の危険を警告する。

ポールとナタリーの結婚財産契約の交渉は、両者の公証人マティアスとソロネの老若二人の介入と、エヴァンジェリスタ夫人の思惑とが交錯してなかなかうまく進行しない。ソロネの提案した案、夫人がその邸宅を売って新婚夫婦と住むことにポールは喜ぶが、マティアスはエヴァンジェリスタ夫人とソロネ合作の案と見て沈黙を守る。彼が反対しそうな様子に、エヴァンジェリスタ夫人はたちまち先に持ち出した破談を再び口にして、さらにいずれ私が死んだら娘のナタリーは自分の遺産を手で貴族院議員とでも結婚できるのだ、とポールが何よりもなりた貴族院議員を引き合いに出して、一種の恫喝を含んだ誘いをかける。

地下の暗黒に居るように思っていた男には、PAIR DE FRANCE「貴族院議員」という言葉が、行く手を照らす松明のように見えるのである。鮮やかなのは、このきわめてクリティカルな瞬間に、すぐ「まるで曙のようなうっとりする姿で」ナタリーを登場させ、そして子供のような口調で「私は余計なのかしら」と言わせることだ。ravissant「うっとりするような姿」という語は魂を奪うような、というのが本来の意味である。まさしくポールはナタリーに魂を抜かれてしまう。そのことをこのたった1行で見事に示しているのである。「私

(50) *Ibid.*, p.575. このマティアスの感慨は、そのまま作者バルザックのそれと考えることも可能だろう。まだ26歳の、小説家として自立するにいたらず、雑多な書き物で日を過ごしていた頃に出版された *Code des gens honnêtes* (1825) に同様の趣旨のことが書かれている。彼がこの『紳士法典』を書く数年前にパリ大学法学部生の傍ら、代訴人ギヨネ・メルヴィルの見習い書記となり、また公証人ヴィクトール・エドワール・パセの事務所で働いて、さまざまな社会の金銭状況を見たことが、こうした酷薄な現実を見据える文章となったのは疑いない。

は余計なのかしら？」*«Suis-je de trop?»* というナタリーの台詞もじつに効果的で、まさしくナタリーは「余計」なのだ。あるいはナタリーという存在が、ポール的心からはみ出すほどになっているのであり、マティアスの目からは、まことに目障りな余計者となる。さらに言えば「子供みたいな様子」とあるのも心憎い。「子供っぽい」ところが強調されることによって、その子供の後見役としてのエヴァンジェリスタ夫人の立場がクローズアップされ、本来結婚財産の契約が、結婚後の子孫育成、その繁栄を意図したものであればあるだけ、ナタリーの幼児性は、ナタリーそのものがその財を食いつぶす可能性をも暗示するだろう。まことに彼女をここで登場させる呼吸は、名人芸という語に値する。

すべてはうまく運んでいる、とナタリーに言い聞かすポールを見て、どうかしてポールの意も適え、ポールの子孫にとっても財産を保全する手だてを拵りだそうと智慧を絞るマティアスと、ひたすらポールのナタリーへの愛情のみを手段として、この不利な結婚財産契約を結ぼうと秘策を練るソロネ。公証人がどういう職業であり、どんな行動が理想なのかについての作者の鋭い目がそこから見えてくる。4人を前にしてマティアスの提案は、ポールのランストラックの土地をナタリーのお金も合わせて近隣の土地と共に世襲財産として登記し、それを賢く運用することによって年間の収入を得るというものだった。この条件ならエヴァンジェリスタ夫人が現在後見人として運用しているお金も認めるし、未払いの分もそのままが良いとする。世襲財産についてのマティアスのこの考えは、バルザックが若い時から構想していたもので、彼の若い頃の論文『長子権について』*Du Droit d'aînesse* (1823) に詳しく述べられており、また他の作品の中でも言及されている。貴族の長子が財産を世襲し、貴族の存続を確かにするという意図が込められたもので、マティアスの提案はこの精神を示すものだろう。

一方ソロネはどう考えているか。ここでマティアスとソロネの違いが明瞭に示されることになる。

若い公証人はこうした契約条項が後にもたらす結果を考えていた。この条項は双方の自尊心と彼の依頼人がよく考えずに示したものだ。しかしマティアスが公証人以外の何者でもなければ、ソロネはもう少し人並みの人間の部分があって、自分の仕事に若い者特有の自尊心を抱いていた。個人的な虚栄心が若い人間にその顧客の利害を忘れさせることがある。こうした状況で、ソロネはネストールがアキレスにうち勝っているように未亡人に思われなくなかったから、彼女にすぐ此の形で終わるようにと進言した。彼にとってこの契約がどう決着がつくのかは問題ではなかった。勝利の条件はエヴァンジェリスタ夫人が義務から解放され、彼女の生活が確約され、ナタリーが結婚することになれば良かったのだ。⁽⁵¹⁾

若い野心家ソロネと老マティアスの公証人としてのそれぞれの資質が、あざやかに写し取られている。マティアスは公証人として40年、仕事に精通するが、それだけにきわめて冷静かつリアリスティックである。一方ソロネの方は若いから、どうしても功名心と野心と結果主義に走ってしまう。マティアスには若い頃の自尊心あるいは自惚れというもの、もはや無い。淡々と公証人の仕事を間違いなくこなしていくのが彼の本領だ。ソロネは一通り法律などの条項を知り、それに従って仕事を進めることができる。しかしそこには自分の能力を誇り、また其の能力を他人に認識して貰いたい欲望が透けて見える。この文章でどれほどソロネの若さが強調されているか、よく読めば理解できるだろう。「若い公証人」とか「若い者特有の自尊心」、「若い人間」。そしてとどめが「ネストールがアキレスにうち勝っている」と、老賢者ネストールと若い英雄アキレスとの比較が来て、これほどに「若さ」を強調することによって、二人の公証人の老若の差が、まざまざと読者の目に浮かび上がってくる仕掛けなのである。

母娘をマティアスが警戒していることをあげて、世襲財産の設定を訝るエヴァンジェリスタ夫人に彼の提案をのむことを言いながら、腹の中で、

「こうした契約の条項はいずれ遠い先でしかものを言わない。だからその頃にはエヴァンジェリスタ夫人は死んでいて、土の中だろう。」⁽⁵²⁾

というソロネの言葉は、いかにも若手の、先を読んでいるようで読めない野心家の公証人のありようを活写する。

夫人はとにかく娘を結婚させたいからマティアスの提案をのみ、ソロネもそれを支持することによって妥結が計られることになった。最終的にマティアスの提案する条件をここで確認しておこう。

「奥様、もし奥様と伯爵がこうした条項で同意いただけるのでしたら、お二方でそのお約束を交わして頂かなくてはなりません。もちろん、ご承知でしょうが」、と言いながら彼は相手をそれぞれにじっと見た。「結婚が成立するのは世襲財産が設定されてのことです。ランストラックの土地とペビニエール街にある邸宅、これは夫となる者のものですが、また同じく現金で80万フラン、妻となる者の持参金として、これは土地を買うのに使うものです。これらが世襲財産です。申し訳ありません、奥様、こんな風な念を押すことをいたしまして。というのも明確で厳粛な契約がこういう場合必要ですのでね。

(51) *Ibid.*, p.580.

(52) *Ibid.*, p.581.

世襲財産を設定するにはいろいろ形式を踏まないといけませんし、尚書局との折衝もあり、王令も必要なんです。それにすぐにも土地の取得をしないといけません。というのもその土地を財産目録に入れて、王令がその譲渡不可を有効とするわけですから。ずいぶん示談とか仲裁とかいうことになる場合が多いのですが、しかし両家の間ではただ同意ということでも十分だと思います。同意なさいますな？」⁽⁵³⁾

マティアスはエヴァンジェリスタ夫人の娘の結婚への強い意志を承知していて、かなり強硬な条件をだしてもことは進むと考えている。大事なことはマネルヴィル家の基本財産の保全だ。最終的に一々念を押して、確かめていく彼のやり方はまさしく公証人そのものであり、きわめて職業的である。しかも最後の1行など皮肉が十分にきいて、エヴァンジェリスタ夫人が同意せざるを得ないよう十分な釘がさされている。もちろん夫人は同意し、ポールもそれに倣う。やがて結婚式の数日前に結婚財産契約書に調印することにして、4人の会談は終わった。それぞれ帰り支度をし、ポールはマティアスに車で送ろうと言うが、マティアスはソロネの申し出をうけて彼の二輪馬車で帰ることにする。車の中でソロネはマティアスに交渉の内幕を話だし、自分が負けたことを打ち明ける。マティアスも得意げに話す。

おぞましい争いに一つの家の物質的な幸福が、実に危うげな形で危機に瀕したものの、そうしたことは二人の公証人にとっては仕事の上での論争にすぎないのだった。⁽⁵⁴⁾

ここにかつて法律家をめざしたバルザックが、寧ろ小説家の道を選んだ理由がすけて見えるかもしれない。たしかに二人の公証人は、それぞれの顧客の家の利害を代表して議論し、智慧をしぼったが、その底を割れば、同じ同業意識と自己の職業知識の優越を証明するために鎬を削っていただけなのだ。だから二人の公証人はこうしておだやかな様子で、喉が少々熱くなったと思う程度にすぎない。そしてこの二人が帰途についている時、

ポールとエヴァンジェリスタは、神経が揺すぶられ心臓が高鳴り、骨の髄から脳にいたるまで震える思いだった。それは情念に溢れた人間が自分たちの利害や感情が、激しく揺すぶられるような場合に強く感じるものだ。⁽⁵⁵⁾

と、後に残っている二人の恋人の姿が描かれて、公証人たちと対照的な感情の起伏に極めて

(53) *Ibid.*, pp.581-582.

(54) *Ibid.*, p.583.

(55) *Ibid.*

皮肉な効果を上げることになる。

VII 「結婚財産契約」

2人の公証人がそれぞれ、自分の弁舌と知識の成果に満足してエヴァンジェリスタ夫人の邸を去ったあと、夫人はマティアスが何をポールに吹き込んだのか、「あのマティアスはわずか数分で、私が半年細工してきたことをぶちこわしたのじゃないかしら？」と心配する。しかしその懸念は、部屋に戻ってきた呑気きわまるポールの言葉で払拭される。

「いやまったく恐ろしい一日だった。生まれてこの方無いようなね。」と大声を上げてポールは、じつに嬉しそうにさまざまな困難な事柄が終わったことを喜んだ。「あれほどマティアス爺さんが厳しい人とは知らなかった。どうか彼の言い分どおりになって、僕が貴族院議員になればいい！ねえ、ナタリー、僕は今は僕よりも君のためにそう強く思うんだ。君は僕の期待そのものだ。僕の人生は君の中にある。」

この言葉が心底から発せられているのが判り、とりわけポールの両眼が澄んで青色に輝き、しかもそのまなざしが、顔つきと同様、何の下心も隠していないのを見て、エヴァンジェリスタ夫人の喜びは十全のものとなった。⁽⁵⁶⁾

いかにもポールの迂闊さとのんびり貴族の坊ちゃんといった感じが出ていて、とりわけ「ポールの両眼が澄んで青色に輝き」le limpide azur des yeux de Paulとあるところは、彼の正直な真率さを浮き彫りにして余すところがない。「下心を表すものは何もない」aucune arrière-penséeとエヴァンジェリスタ夫人が見るのは、その逆に彼女の方にそうした「下心」arrière-penséeがあることを示すことにもなり、夫人のそれまでの屈託と比較して、両者の相違をじつに巧みに読者に印象づける。

そのことは夫人がポールにややきつい言葉を使いすぎたかと心配して、少し機嫌を取る風にする描写にも表れている。

彼女は落ち着いた様子を取り戻した。その目にあの優しい親愛の情を見せると、彼女はいっそう魅惑に満ちる。それからこうポールに返事をした。「私もあなたと同じ思いですわ（略）」⁽⁵⁷⁾

「その目にあの優しい親愛の情を見せる」という表現は、それこそポールの「澄んで青色に

(56) *Ibid.*, pp.583-584.

(57) *Ibid.*, p.584.

輝く目」とまったく対照的なものであることがよく判るはずだ。しかも彼女のその目つきは「魅惑に満ちる」*séduisant* ものである。*séduisant* であるのはその目つきだけではない。彼女の言動そのものが「誘惑的なもの」*séduisant* であり、そこに彼女の作為が歴然と感じられて、ポールのお人好し加減がまざまざと浮かび上がる仕組みとなる。狭知にたけたエヴァンジェリスタ夫人が、ポールを手玉に取るのはたやすい。まして今はもうマティアスは自分の仕事に満足して帰ってしまって、ここにはいないのだ。

夫人は自分の娘への借財を弁済するために、自分のダイヤモンドと邸を売り払うことを言う。ナタリーはそれを聞いて、母親に犠牲を強いることになるのなら結婚を止めた方がまし、などとポール目の前で親子で愁嘆場を見せる。一見道理を説くかに見えるエヴァンジェリスタ夫人の言葉に、彼は感激してその場を引き上げることになる。エヴァンジェリスタ夫人はこうしてポールの信頼を得るとともに、彼への貸しをも与えるのだ。実際ポールは家に帰って眠りに就く時、

「あの姑はすばらしい女性ようだ」と彼はつぶやいた。まだエヴァンジェリスタ夫人が議論からたち昇った暗雲を振り払うのに躍起となった、その弁舌にすっかり誤魔化されてしまっているのだ。「マティアスは間違っている。公証人といった連中は変わっているな。みな悪い方へしか持っていけないのだから。」⁽⁵⁸⁾

と考えるのだ。「誤魔化されてしまっている」と訳した *des patelineries* は、中世の笑劇「パトラン先生」から来たもので、誤魔化し、おだてて相手を煙にまいてしまうことを言う。いかにもポールはまんまと騙される善人である。

しかし家伝来のダイヤモンドが一体どれくらいの財産となるものか。エヴァンジェリスタ夫人がその鑑定を依頼するのがユダヤ人の蒐集家、エリ・マギス⁽⁵⁹⁾。このエリ・マギスの登場は一体なんの意味があるのだろうか。一つにはエヴァンジェリスタ夫人の財産の特定ということがあるが、ポールとナタリーの結婚が危ぶまれることになったことについて、著名な彼の鑑定で厳しい評価を受けたという噂がボルドーの上流社会に流れるという、こうしたもってもらしいエピソードを挿入することによって、いっそう本当らしさを増すためだと思われる。

(58) *Ibid.*, p.586.

(59) 彼は隠れた美術愛好家、画商として『私生活情景』では『ラ・ヴァンデック』で活躍し、また『ラ・ラビユーズ』でも登場するが、『いとこボンズ』でその個性を最大限に発揮して大活躍するのはよく知られる通り。『結婚財産契約』の物語はボルドーで展開するから、エリ・マギスがエヴァンジェリスタ夫人が鑑定を思い付いたその翌日に邸に現れるのは、いささかその住所が疑われるところだが、フランスの研究者もそこところはとがめ立てはしないようだ。というより『ピエール・グラスナー』という画家を主人公とした短編で、エリ・マギスはボルドーからパリにやってきた画商、となっている。ところがラ・ラビユーズ』ではパリで画商をやっている。しかもその同じ年に『結婚財産契約』でボルドーに現れているのである。人物再登場の一つの矛盾であろう。

バルザックの小説において、噂 *comméragé* が極めて重要なファクターとなることはよく知られている。貴族のサロンで交わされた密談が翌日には町中で知られることになった。はたしてそんなことがあり得るのか、どうか。そこに小説の嘘があるわけだが、よく考えると、じつは深い人間心理がそこに隠されているのかも知れない。

いずれにしても、夫人のナタリーへの返済の話、結婚の契約が交わされる話は、ボルドー中に知れわたっており、ダイヤモンドが結局は売りに出されなかったということになる。必然的に結婚が危ぶまれることになるのは確かだ。そのためわざわざその事実を確かめるために、世の噂を憤慨する形を装って、年頃の娘を抱えるゲイ夫人などは、偵察方々エヴァンジェリスタ夫人の邸を訪れて、夫人の落ち着いた様子に、ほうほうの体で逃げ帰る、という茶番まで用意されている。エヴァンジェリスタ夫人はボルドーの町中の人間に契約書を交わす日に邸に来て貰い、最後となる「名の日」を豪華に祝って社交界での馬鹿馬鹿しい嘘の数々をはっきりと暴くことになった。

契約書が交わされるその日は、準備に40日もかけ、邸という邸は椿の花で埋め尽くすという派手なもので、夫人にいったいどういう意図があるのか。もちろん彼女が派手好きということもあろう。衆目の見るところで、夫人がどれだけ新しく婿となる男に最善を尽くすか、婿となる男がどれほどエヴァンジェリスタ家と縁組みすることで益を得るかをアピールする狙いがあるに違いない。しかしこうした華やかな準備の期間が、白熱した契約論議を遙か遠いものとしたことは確かながら、エヴァンジェリスタ夫人はいよいよ契約の前夜となると、いちいち契約の時の有様や、マティアスの反対していたのに、案外すんなりと穏やかな提案となったことに、却って不安を覚えるようになった。

そして契約の当日、肝心のポールとナタリーは契約の条項を読むのも上の空で聞き流し、夫人をいらいらさせた。その契約がどんなものか、もう一度彼らと同じように読み直してみよう。

夫婦の持ち寄り財産の記載。子供なしに死んだ場合の総括遺贈。民法に定める子供の数に関わらぬ遺贈分としての4分の1の用益権と4分の1の土地所有権、共有財産の設定、妻へのダイヤモンドの贈与、夫への書籍と馬の贈与、そうしたすべては異議無く済んだ。次に来たのが世襲財産の設定だった。⁽⁶⁰⁾

「妻へのダイヤモンドの贈与」とあるところは、エヴァンジェリスタ夫人がエリ・マギスに売りに出そうとしたダイヤではない。これはポールが結婚の際に自分がもっているダイヤ

(60) *Ibid.*, p.596.

を贈与するというのだ。世襲財産というのは、個人の名義にならず「～家」という貴族の家柄に付随する。これは嫡子が相続して、さらにその子へと代々に受け継がれるもので、夫や妻が勝手に処分できない財産である。老練な公証人マティアスがエヴァンジェリスタ夫人とその娘の浪費癖から守るために、この1項目を入れさせたのだった。ところがこの世襲財産ということ、エヴァンジェリスタ夫人は理解していなかった。あるいは理解できない振りをして聞きただす。「そうすると娘の財産はどうなるのか?」と。じっさい二人が持ち寄る財産を合わせた上で、さらにそこから世襲財産を設定するから、ナタリーが自由に処分できる財産は少なくなる。まして彼女自身の財産は夫人が使い込んでいて、それこそ邸を売り、ダイヤモンドを売ったりして調達しなければならない。夫人が「娘は破滅だわ!」と呟くとおりなのである。マティアスは一家そのものの財産が確保されるのだから「どうして破滅になるのです?」と強く言う。一方のソロネは「破約するか、締結するしかありません」と彼の敗北を認める。その時の関係する人物たちの描写。

その時、そこにいる人間の沈黙の瞬間は筆舌に尽くしがたいものがあった。マティアス氏はいかにも勝ち誇ったように二人（夫人とソロネ）の署名を待っている。その二人こそはマティアスの顧客をすっかり裸にしたと信じきっていたのだ。ナタリーは自分の財産の半分を失おうとしていることに気づくどころではなく、ポールはマネルヴィル家がその半分を手に入れようとしていることも知らずに、二人とも笑いこけ、いつまでもおしゃべりして止めない。ソロネとエヴァンジェリスタ夫人はお互い顔を見合わせながらも、一方はいつでもよいといった気持ちを見せないよう、一方はどっと押し寄せる苛立った感情を見せないようにぐっと堪えていた。⁽⁶¹⁾

筆舌に尽くしがたいといいながら、その実に微妙で、重くるしくも滑稽な一場の情景が、四者の立場をくっきりと浮かび上がらせながら描いているところに注目しよう。登場人物それぞれの性格が、その付随した形容で見事に特徴づけられている。エヴァンジェリスタ夫人は自分の財産情況、ポールと結婚させることによって、財政的に救済されようとする彼女のたくらみを、老マティアスが察知してポールにそのことを教えたのではないかと思いはじめた。そして老マティアスへの、さらにポールへの癒しがたい憎しみが彼女に湧いてくる。というのも、今こそボルドーの人々の目の前で結婚の契約を交わす、そのもっとも肝心な場面だ。初めはポールは何とでも言いくるめられる若者と高をくくっていた。ところがこのぎりぎりの段階で、彼女の思惑が見事にひっくり返されたのだ。いまさら2日後に迫った結婚式を延

(61) *Ibid.*, p.597.

期するわけには行かない。自分よりは老マティアスの人々は信用するだろう。彼は40年にもわたってボルドーで公証人を続けてきており、自分はそのそこ10年くらいのボルドー暮らしにすぎない。

彼女が怒り心頭に発しているのを見て取ったソロネは、いずれ結婚したらナタリーがマネルヴィル家の主人となって、ポールを思う様引きずり回せるだろう、「あの男の妻の、ということつまりあなたの、ということではありませんか？伯爵ポールの運命は、やっぱりあなたの手の中にあるわけですよ⁽⁶²⁾」とエヴァンジェリスタ夫人に囁く。ソロネの言葉によって、若夫婦に対する自分の影響力の重要性和その実効を確認したエヴァンジェリスタ夫人の目はきらきらと輝く。先にポールの目を形容して「澄んで青色に輝く目」とあったことを思い出そう。エヴァンジェリスタ夫人の目は、この時色が鮮やかさをます *colorer* と書かれる。こうした表現は、むしろ動物の目を形容するときにくさくさい。彼女がもちろん生気を吹き返す象徴としての形容であると同時に、彼女の獐猛さを意識させるだろう。このあたりから夫人とソロネの逆襲が始まる。

夫人の庇護を取り戻したいソロネは、契約条項を見て、マネルヴィルが子供の無いままに亡くなった場合と、あっても女子ばかりだった場合の世襲財産についての取り決めがされていないことを指摘して失地回復を図ろうとするのだが、一般に老練な公証人がソロネの指摘するような間違いを犯すだろうか。小説の展開上、そのような落とし穴が設けられたのは、マティアスがポールの財産保全を考えるあまりに、そして逼迫した情勢のあまりに急いで考案した窮余の策であることを示すとともに、男系をしか頭に描かない老公証人の古い体質を物語っているとも解釈できる。その不備を発見するのがまさしく「若い」公証人であることはそのことを裏づけるだろう。

ソロネは第一の場合は夫婦間で財産を分け合うこと、第二の場合は世襲財産そのものを無効にすること、という条項を入れさせることに成功する。これはマティアスも同意せざるを得ない。エヴァンジェリスタ夫人は大きな希望を与えられた。彼女の「署名しましょう」と意気込んで言う言葉、この間髪を入れないやり取りで、契約書の字句を斟酌して、取り決めに書きこむことはできなくなる。小説的現実の巧みな創造というべきだろう。エヴァンジェリスタ夫人は自分の財産の保全と、さらには増幅の手段を、ソロネの提案で見つけることになった。まさしく

確かにマティアスは利害の検討については精通していたが、人間の情念にはほとんど疎かった。彼はその夫人の言葉を、過ちを潔く認めてのものと受け取った。本当はそこに

(62) *Ibid.*, p.599.

戦闘開始宣言を見なければならなかったのに。⁽⁶³⁾

エヴァンジェリスタ夫人はソロネの言葉から、娘が結婚によって家柄も貴族の称号も、さらには財産も手に入れるばかりか、家庭での実際的な権限を得ることを悟る。ポールがその妻を愛しているのは十二分にわかっている。しかし、もしナタリーが彼を愛さなかったらどうなるか。ことは世襲財産である。子供が二人の間に生まれなかったら、マティアスの策略はほとんど意味を持たなくなるのだ。

VIII *J'ai la théorie, la pratique viendra.*

マティアスのマネルヴィル家に対する忠節と、ポールへの細やかな配慮にもかかわらず、契約事項の重大さに気づかないポールは、契約が無事に成立すると、いかにも嬉しそうにマティアスの手を握りしめる。その様がエヴァンジェリスタ夫人の猜疑の目にとまり、深い不信と不快の念を呼び覚ましたことに気が付かない。夫人のダイヤモンドをポールが要求せずにいるのをマティアスが注意すると、夫人は内心怒髪天を衝く思いで、自分の居間に取りに行き、ダイヤを叩きつけるように4人の前に置いた。語り手は次のようにポールとエヴァンジェリスタ夫人の心理を分析する。

憎悪は恋愛に似て、ほんの些細な事柄から育って行って、すべてがその方向に向かう。ちやうど愛する人間が何をして悪く思われることがないように、憎いと思う人間は何をして良いようには思われない。エヴァンジェリスタ夫人は、ポールがなんとなく恥ずかしい気持ちからの仕草を、いかにもわざとらしいと決めつけてしまった。彼はダイヤモンドはそのままそこに残しておこうと思っていたが、どこに宝石箱を置くのかもわからなかったから、窓から捨ててしまおうかとさえ思っていたのだった。エヴァンジェリスタ夫人は彼の当惑を見て、きつい目で睨み付けていた。それはまるでこう言っているかのようだった。「ここから持って行きなさいよ」

「ねえ、ナタリー」とポールは未来の妻に言った。あなたがその宝石を取ればいい。あなたのものだよ。さしあげますよ」⁽⁶⁴⁾

ポールのお人好しさ加減が辛辣に描き出され、婿となるポールに対するエヴァンジェリスタ夫人の不信感がいよいよ増大し、彼のすること、なすことの一切が彼女の勤に触ることが、あざやかに映し出されてくる。契約も済み、招待客がさまざまに噂話にあけくれる宴会も果

(63) *Ibid.*, p.600.

(64) *Ibid.*, p.602.

てたあと、それぞれ眠りにつくエヴァンジェリスタ夫人とポール。ながながと暢気な反省をした挙げ句に「まあこんなことでよくよして何になる？何日かしたら、ナタリーは妻になるのだし、両者の利害はきっちりとされている。何も二人を引き離すものはない。さあこれから辛い生活だ！それにしても用心しないとイケないな。マティアスの言うことが正しければ、ま、いいか、姑と結婚するわけじゃない。」と自らに言い聞かせるポールに対して、一方のエヴァンジェリスタ夫人は一言、「すべては明日」とだけ言って眠りにつく。⁽⁶⁵⁾

しかしその一言はポールの百言にも勝るだろう。クレオールの子がどれほどわがままで、執念深く、しかも自分の情念を満たすために恐ろしいまでのエネルギーを使うかが、いささか差別的ではないかと思われるほど一般化して述べられ、この母親の絶大な影響のもとに娘のナタリーがいることが強調される。ポールとナタリーが結婚するまで3日。その3日の間に、エヴァンジェリスタ夫人は徹底的に娘に自己の影響力を永続的なものとして吹き込もうとする。彼女は妻の夫への支配能力を発揮するための秘訣、亭主の鼻面を引き回して、思うがままの生活を続ける徹底的な手法を教え込んだ。それは夫とできるだけ一緒に過ごすことのない生活を続けることだ。夫人は娘にこう諭す。

よくお聞き、愛情が無くなったら、その後に来るのは無関心か軽蔑だけなのよ。だからいつも若く、新鮮なままでいるのよ、彼のためにね。彼が嫌になる、そんなことになるかもしれないけれど、お前があの人に嫌だと思われることは絶対ないわ。ちゃんと自分の良いときに相手が嫌になることができる、っていうのが、力を発揮する条件の一つなのよ。⁽⁶⁶⁾

こうした恐ろしいほどの *femme mondaine* のありようを聞かされた娘のナタリーが、母親の言葉を聴いて自ずからその意図を察して答える言葉は、あるいは母親以上に冷徹な彼女の姿を浮き彫りにするだろう。

「理論は学んだわ、次は実践ね。」 « J'ai la théorie, la pratique viendra. »

さらにエヴァンジェリスタ夫人は、ブルジョワ女のように結婚してすぐ妊娠してはならない、ポールに常に期待させるようにもっていき、そのことで愛情の点で優位に立てるのだと力説する。こうした教訓をナタリーに与えることによって夫人は何を言おうとしたか。すなわち性的な関係をたやすく結ぶなということだ。子供を作るな、と言外に言っているのでは

(65) *Ibid.*, p.605.

(66) *Ibid.*, p.610.

る。彼女の意図は明らかだろう。すなわち世襲財産の無力化。エヴァンジェリスタ夫人の教訓は、プレイアッド版原本で5頁から6頁あまり続くが、社交の恋愛の手管の詳細がそこには描かれていて、人間心理の背後にまで精通する語り手の鋭い眼差しを感じることができる。

エヴァンジェリスタ夫人は屋敷を売ってランストラックに引きこもり、つつましい暮らしをするように見えるが、地所や屋敷、それに調度を売った金を、腹心となった公証人ソロネに運用させて、自分の生活を確保しつつ、自分を娘と一緒にパリに住まわせないポールを悪者にして、ナタリーの主権の確保を待ち受けるのである。そして物語は Conclusion「その結末」と書かれた結末に一気に移る。

すでに結婚から5年、年老いたマティアスは、せっかく苦心して結ばせた結婚財産契約が、ポールには何の役にも立たなかったことを知る。すでに彼のボルドーの地所や邸宅は売りに出て他人の名義になっており、ナタリーの言うがままに、エヴァンジェリスタ夫人の財産には手をつけず、むしろ自分がその肩代わりをするような形でナタリーの財産を却って増やし、彼自身がいつの間にか莫大な借金を負う羽目になっていた。こっそりと老公証人に会いに来たポールは、これから失った財産をはるかインドで立て直そうと言う。ポールが打ち明ける財政の内容は、どれほど彼がナタリーの言うままに放胆な生活を続けて来たかを示すものだった。一方のエヴァンジェリスタ夫人は、ソロネの協力もあって彼女の住まうランストラックの土地を巧みに運用してブドウを栽培、いよいよ収入を増やし、ポールとは逆に節儉した生活を送っている。しかも田園生活が彼女をいつまでも妖艶な美しい女として君臨させているという。マティアスと交わす以下の会話は、ポールの迂闊さをまざまざと見せつける。

老マティアスはポールのお話を聞けば聞くほど、疑わしそうな、思いもかけないような様子を見せた。

「子供はないのですか？」と彼は問うた。

「ありがたいことにね」とポールが答える。

「私は結婚というものを、あなたとは違った風に考えています。」と単簡に老いた公証人は応じた。「妻というものは、私の考えでは、運、不運を夫と分かち合うものだと思いますがね。世間では若い夫婦が恋人のように愛し合っていると子供ができないなど言いますが、それじゃ快樂だけが結婚の目的なんですか？それよりは家族の幸福、ということではないでしょうか？」⁽⁶⁷⁾

「子供はないのですか？」と聞かれて、「ありがたいことにね」*heureusement* とポールが答

(67) *Ibid.*

えるところは、語り手の恐ろしいほどの皮肉が込められている。本来なら、「残念ながら」*malheureusement* と答えるべきところで、そのことの二重の意味合いをポールはまったく理解していない。マティアスの言葉は、それこそエヴァンジェリスタ夫人が罵るブルジョワ精神の固まりである。しかしそのブルジョワ的な結婚、「家族の幸福」が、ポールの、すなわちマネルヴィル家の幸福を維持する不可欠の要素なのだ。ポールが交わした「結婚財産契約」によって世襲財産を設定してあればこそ、マネルヴィル家は維持される。そのことは、つまり貴族階級としてブルジョワを軽蔑しながら、ブルジョワ的な価値観に結局は支配されることになるのである。この皮肉な実体こそが、この『結婚財産契約』という小説のポイントにはかならない。そのことが結末に至ってようやく明らかになるところに、作者の周到な用意を見ることができる。

しかも「家族の幸福に結婚の目的がある」というのは、本来のフランス貴族でないエヴァンジェリスタ夫人の非難してやまぬものでもあった。ポールの愚かさは、マティアスのブルジョワ的な忠告を聞かず、エヴァンジェリスタ夫人の策略に見事嵌まるところにはっきりと浮き彫りになる。エヴァンジェリスタ夫人が二人の結婚に際して懇々と説いた忠告に、ナタリーがどう答えたかを思い出そう。「理論は学んだわ、次は実践ね。」ポールもまたマティアスから結婚に際して切々と教え諭された。しかし文字通り、「実践は遂になされない」*la pratique ne viendra jamais* のである。

Ⅸ ワーテルローの戦場 — 小説構造の美学 —

インドへの出帆を思いとどまらせようと説得するマティアスをよそに、翌日ポールは群衆の嘲りの声を聞かぬかのように船に乗り込む。その時老人の家政婦が息を切らせて持ってきた手紙が2通。1通は速達だったが、そこに妻とマルセーの筆跡を見て、どうせ泣き言か、いつもの忠告と思ったポールは、伊達男を気取って水夫の前で素知らぬ振りに2通をポケットに入れ、結局それらを読んだのは船出の後、船酔いに苦しんだ翌日となった。ポールの後手後手にまわる無能が、最後の手紙の場面で一層クリティカルな予感を読者に与えることになる。

ポールはナタリーがまだベッドにいるうちに、そっと置手紙をして出てきたのだった。彼の置手紙には妻への愛情と、再起をかける言葉に溢れていて、それはそのまま彼の5年間の夫婦関係を示している。その手紙の結語。

いや、インドの太陽じゃない、君のまなごしの炎が僕を明るく照らすんだ。どうか幸せでいてほしい、恋人のいない女でも幸せになれるのだから。僕は最後の接吻はしたくない、だってその接吻は君の意思のないときにするのだから。いや、僕の愛する天使、僕のニニー、君の目を覚ましたくなかったんだ。目が覚めたら、涙が一滴、君の額の上に

あるだろう、それをお守りにしておくれ。いつも、いつも思っていておくれ、おそらくは君のために死ぬことになる男のことを、君から遠く離れて。思っていておくれ、夫ではなく、君に身を捧げ、神に君を託す恋人のことを。⁽⁶⁸⁾

いかにも甘ったるい、安物のラブレターの常套句に満ちたこれらポールの言葉の羅列は、続くナタリーの手紙とマルセーの手紙を読むとき、その人間の甘さを酷烈に示すことになる。ナタリーの手紙もまた熱烈な愛情の手紙だ。彼女はまずこう書き始める。

愛する人、どんなに悲しい思いをあなたの手紙は味わわせたことでしょうか！どんな権利があって、私に一言も相談なく、二人にとって重大な決心をしたのです？⁽⁶⁹⁾

とまずナタリーは愛情を持っているふりでポールを詰^なめてみせる。そう言いながら彼女は「あなたがこれほど私の目に立派に見えるのは今この瞬間よ。何物にも絶望せず、一旗上げようと出かけていく、あなたの性格と力があればこそ、そんなことができるのだわ。」と家を出たことを誉めあげ（つまりはすぐ帰る気持ちを起こさせないようにして）、かえってポールがフランスを離れる尻押しする。注意しなければならないのは、すぐにでも見送りにボルドーまで出かけようと思ったが、ちょうど妊娠初期で馬に乗ると体に障ると母が言い、彼女自身もつわりみたいに気分が悪いので、この手紙もベッドで書いている、といかにも健気な妻を装う文面だ。彼女の手紙は次のように締めくくられる。

私は今はそれほど不幸じゃないわ。この砂漠もやがて私たち二人の子供でにぎやかになるじゃない？そう、私はあなたに息子を産みたいと思うの、そうしなくちゃ、いけないでしょう？さあ、お別れね、愛する人、二人の誓いと愛はどこまでもあなたについていくわ。この便箋に付いている涙で、私の言いたくも言えないことがわかるでしょう？接吻をあなたに贈ります。この手紙の下の四角のうちに。 ナタリー⁽⁷⁰⁾

ポールは残してきた妻の手紙を何度もうっとりした気分で読むが、次第に不安な気分が襲われる。とりわけ妊娠の事実が彼を不安にした。詳しく書かれてはいないが、嫉妬の気持ちも出てくる、とも書かれてある。すなわちポールは妊娠の事実を実感できないことが暗に示されるのだ。妊娠することを母から厳に戒められていたナタリーが、そのことを手紙でポー

(68) *Ibid.*, p.631.

(69) *Ibid.*

(70) *Ibid.*, p.636.

ルに知らせるのは何故か？しかもポールにはその事実の実感が無い。それは彼女の不貞の事実を裏書きするとともに、それをあくまで正当なポールの子として認めさせる証拠の文ともなるだろう。

ポールの甘い幻想は、次に読むことになるマルセーの手紙で打ち砕かれる。彼の手紙は、あたかもナタリーのそれが、ポールの彼女への手紙の1行1行と対応していたように、また1行1行対応して、手紙で書かれたことの表面と裏面とを映し出すかの如くである。マルセーはナタリーとエヴァンジェリスタ夫人が共謀して、意を受けた高利貸しや公証人を動かし、ポールの領地を自分たちのものにしていく事実を明らかにする。さらに彼女たちがどれほどマルセーとポールの間を裂こうと努力したかを逐一述べる。そしてナタリーがどれほどフェリックス・ド・ヴァンドネスに入れあげているかまでも暴露するのだ。⁽⁷¹⁾興味深いのはマルセーによるナタリーの社交界での遊びぶりの暴露とその批評が、そのままエヴァンジェリスタ夫人が結婚の前日ナタリーにとっくりと聞かせた教訓とそっくりであることだ。ナタリーはフェリックスに対して、無関心、あるいは冷たい応接を装っていたが、まさしくそのことが彼女のフェリックスへの激しい恋心を示す物だとマルセーは言う。彼はパリ社交界の人間関係を包まずポールに教え、その中でどのような陰謀や策略が渦巻き、それぞれが必死でその渦のなかで自己の利益のために這い上がるかとしているかを説く。そして最後に「帰ってこい、君の友人アンリ・ド・マルセーのところへ。」と手紙を締めくくる。ポールはハンマーで打たれたような思いをするが、そのときには船はすでにアゾレス諸島にまでさしかかっていた。物語は以下のように終わっている。

「いったい僕がああ二人に何をしようんだ？」と彼はつぶやいた。

この問いこそ愚か者の言葉、弱い人間の言葉であって、何一つ見る術^{すべ}を知らず、何一つ予見することができない連中のものである。彼は「アンリ、アンリ」と忠実な友の名を呼ばわった。多くの人間が狂気におちいるところを、ポールは床に就き、深い眠りに沈んでいった。途方もない災害をうけたあと、あのナポレオンをワーテルローの戦いの後に襲ったあ⁽⁷²⁾の眠りである。

小説『結婚財産契約』を締めくくる最後のこの文章は、作品の構造を見るときわめて意義深いものがある。もちろんそこに「知る」*savoir*と「見る」*voir*というバルザックにおけるもっとも重要な要素が、ポールに欠けていることをはっきりと示して、彼をヒーローにし

(71) ナタリーがフェリックス・ド・ヴァンドネスと恋愛関係にあるのは、この小説が刊行されるのとはほぼ同時に連載が始まった『谷間の百合』*Le Lys dans la vallée*に詳述される。執筆時期を考えれば、両者の近親性は明らかである。

(72) *Ibid.*, p.653.

なかった最大の理由としていることも注目すべきだろう。彼においてこの二つが如何に欠如していたかは、すでに引用した小説中の各場面に見ることができるし、また論じもしてきた。しかしこの小説の構造を分析する上で、いっそう興味深いのは、このポール・ド・マネルヴィルのここまで語られてきた半生が、物語の冒頭で、彼の父親の人生を略述した箇所と隠微のうちに重なって見えてくることである。しかもまったく対蹠的な形で。

小説冒頭の記述を思い起こそう。ポールの父親はリシュリユー侯爵の知遇を得ていた。放蕩者でもあり、やり手でもある元帥は、ポールにおけるアンリ・ド・マルセーに通じるだろう。ポールの父親は元帥の肝いりで妻を娶るが、マルセーはその逆にポールに非婚を説く。父マネルヴィルは、ポルドーの大金持ちの娘と結婚するが、その娘の持つ「美しいランストラックの城と領地」をわが物とする。あたかもポールがその城と領地をナタリーと結婚することによって、まんまと妻のものにされるのと全く裏腹である。父マネルヴィルは「若い時にさんざ浪費したおかげで資本が重要だということを身をもって学び、また多くの老人と同じように実際以上にその資本に重きを置いた」と書かれていた。ポールも父から受け取った豊富な富を浪費することになるが、そのことで「資本が重要」ということを学び、「資本に重きを置く」ことは忘れてしまっている。そして革命が起こってその財産維持が難しくなると、父マネルヴィルはマルティニック島に逃れて財産の保全を図った。これは、そのようにして父親が築いてきた財産を、クレオールの母娘によってすっかり失った息子が、インドで財産の再獲得を目指そうとすることと対蹠的で、すべて父子の人生の経路は見事に表裏をなしているのである。さらに興味深いことに、父親が金満の貴族の一生をポルドーで終えるのが1813年、すなわちナポレオン没落の1年前のことであることだ。いわば彼はワートルローの敗北とその混乱を見ずに亡くなったことになる。

物語の最後で、ポール・ド・マネルヴィルは「深い眠りに沈んでいった。途方もない災害をうけたあと、あのナポレオンをワートルローの戦いの後に襲ったあの眠りである」と書かれる。ポールはまさしくワートルローの戦いに敗北したのだ。ここで結婚前にリシュリユー元帥に匹敵する蕩児であり、かつ冷徹なりアリスト、マルセーがポールに言った言葉をもう一度思い出す必要がある。

結婚してしまうと、失敗したら、取り返しがつかない。愛人なら一度決めたことが不利だと分かれば女を引き返させることもできようが、この退却は亭主にとってはワートルローなのだ。ナポレオンのように、亭主は常に勝利していなければならず、いくらたくさん勝ち続けてもひとたび一敗地に塗れれば、その地位をひっくり返されることになる。女はあれほども愛人の執着を嬉しがり、腹を立てられてうっとりとなるのに、それが亭主となると暴力だ、と言いつのる。独身者はどこでも好きな陣地を選べるし、どんなこ

とでも出来るが、一家の主人ともなればすべて禁じられている。そしてその戦いの場を
変えることはできない。⁽⁷³⁾

物語の最後にポールの眠りを「ワートルローの戦いの後に襲ったあの眠り」とするのは、
はなはだ意味深長だ。ポール自身にはほとんど自覚がないが、彼はまさしく夫として一敗地
に塗れたのである。

父親のボルドー貴族との結婚によるランストラックの城と領地の獲得から、その息子のそ
の父親の道を忠実に踏むように見えながら、実はまったく正反対の道を辿る軌跡は、マル
セーの冷徹な「民法学」の指し示す通り、一つの永遠の円環を描くように、物語の最初に
戻ってくる。

『私生活情景』の各編は、さまざまな若い男女の結婚のありようを語って、実に綿密に計
算された形で亭主たちの「ワートルローの戦い」を描いていく物語集である。この『結婚財
産契約』に続く『私生活情景』の掉尾を飾る作品『続・女性研究』が、ポールに結婚の危険
を縁々論じたマルセーの女性をめぐる告白に始まって、ナポレオンの戦争が絡む夫婦達の葛
藤を記すのはそのことを証明するものだろう。

(73) *Ibid.*, pp.535-536.

L'art de raconter une nouvelle chez Balzac

— le cas du *Contrat de mariage* —

Takao KASHIWAGI

Le Contrat de mariage, trentième nouvelle des *Scènes de la vie privée* dans le catalogue de *La Comédie humaine* dressé par Balzac en 1845, a été incluse d'abord en 1835 dans le tome 2 des *Études des mœurs au 19ème siècle* sous le titre *La Fleur des pois*. Les trois premiers récits de ce tome 2 traitent des fautes et des malheurs des héroïnes. Le thème du quatrième conte, *La Fleur des pois*, aurait-il donc été les fautes et le malheur du héros? Cependant cette nouvelle, intitulée plus tard *Le Contrat de mariage*, se place entre *L'Interdiction et Autres études de femme*, la dernière nouvelle des *Scènes de la vie privée* dans l'édition définitive de *La Comédie humaine* de 1842. Ces deux nouvelles traitent de la tyrannie et de la trahison des femmes infidèles. *Le Contrat de mariage* se range-t-il donc dans le même registre que celles-ci?

En fait, Paul de Manerville, le héros de cette nouvelle, enfant soumis jusqu'à la mort de son vieux père, est rentré dans son pays natal après avoir presque épuisé la fortune héritée de son père, pour être un gentilhomme de province en se mariant raisonnablement avec une fille belle et riche. L'auteur détaille les rivalités des deux notaires chargés de dresser le contrat de mariage, l'un vieux et expérimenté, qui fait tout ses efforts en faveur de Paul, et l'autre, jeune et ambitieux, qui veut obtenir des conditions avantageuses pour Mlle Evengélista dont Paul s'est épris et pour sa mère. L'analyse de la description minutieuse de la scène où est mis au point le contrat de mariage nous mène à supposer que l'auteur incline plus à dévoiler la ruse et l'astuce des femmes qu'à montrer la sottise et l'irréflexion du jeune homme.

En décrivant le déclin de Paul de Manerville dont la vie s'avère finalement le contrepied de celle de son père, Balzac réussit à lier *Le Contrat de mariage* à la nouvelle suivante, intitulée *Autre étude de femme*, dont le thème est la vengeance des maris contre les femmes infidèles.